

Casket



There are many reasons why men go fishing.
For some it means escape from the noise and
turmoil of every day life.
For others , it is a change from the monotony of
sitting on an office stool all day.
others are drawn by its exciting uncer tainties.

Casket



Special thanks

Tetsuya Kataoka , Kentarou Kawamura , Toshiyuki Koyama
Takumi Shinba , Toshiyuki Yoshita , Ryou Nakatsuka
Shin-ichi Nagamori , Kouji Tokuda , Toshihide Shibata
Seiji Kuwahara , Masanori Okumura , Isamu Tsuneyama
Shinobu Mihara , Hironobu Tanaka , Toshiya Domon
Shin-ya Amano , Naoki Ishikawa , Yasuhiko Shiga
Takashi Kobayashi , Kazuya Miyamoto , Tomoya Tanaka
Ken-ichirou Kawano , Satoshi Hara , Youji Kawamura
Takahito Shinoda , Yukio Morikawa , Matsuhiro Hayakawa
Eiji Koga , numa , Kouji Go , Noriyuki Saitou
Nobuyuki Kasuga , Ryuuetsu Urusida , Yoshitaka Hamaura
Youichi Arai , Keita Akama (KRUISE) , Hiroyuki Konnai
Takanori Fukumaru , Tadao Inotani , Shigetoshi Nakajima
Shin-ichi Nakawaga , Toshimitsu Itou , Akira Saitou
Tadayuki Ichikawa , Kazunobu Nakagawa , Hiroaki Ishida
Norihiko Sugiyama , Souichi Ooishi , Keijirou Nishi
Masayuki Kyouya , Tomonori Shinozuka , Toshiaki Toyoda
Tatsuya Kanei , Takeshi Ohtani , Akio Koizumi

Contribute writer & photographer

Yoshitaka Takeuchi , Yutaka Miyazawa
Yuuta Takigahira , Mikio Fujii
studio marsh , Yuuichi Honda
Kouhei Furuwa , Shigeo Shiiba

Illustrator

lady bird , studio vis
Satoshi Sasabuchi , whozzy wife

Designer

Hirokata Matsuzoe

Publisher & Editor in chief

Hiroshi Teshima



HIGH QUALITY
TACKLE FOR
STYLISH ANGLER



MY FAVORITE
TOP WATER
ALL FISH HUNTING

CASKET

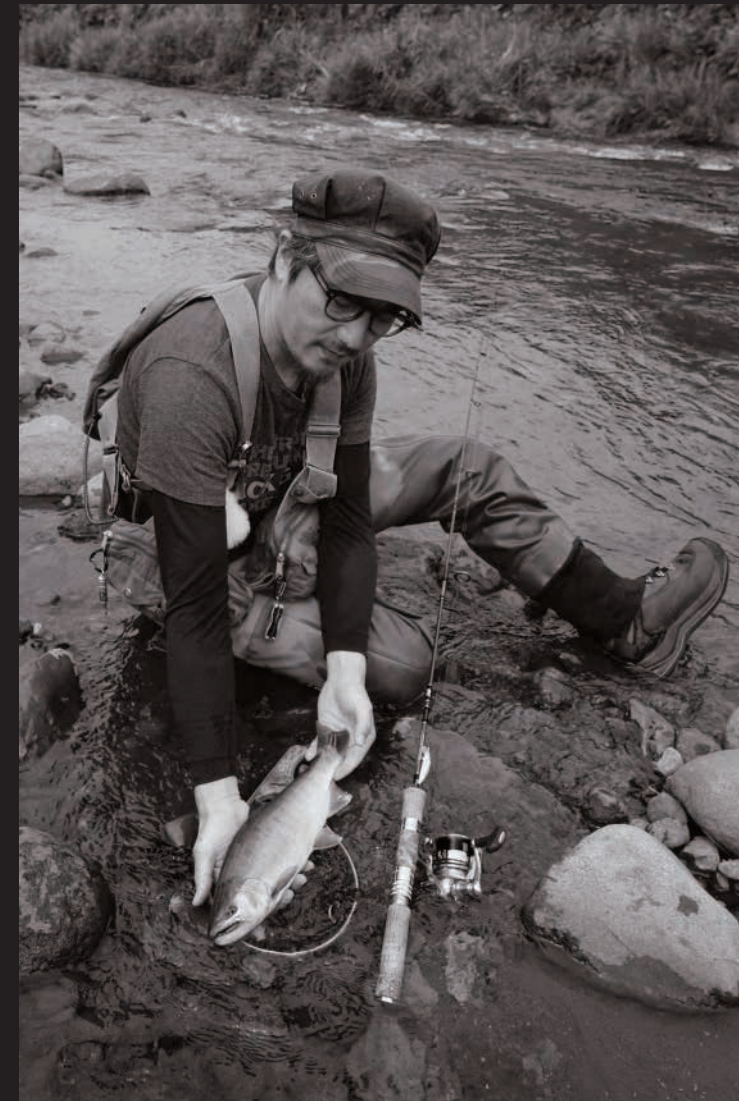
<http://www.club-casket.com>

〒816-0802 福岡県春日市春日原北町1-3-10-101

TEL.092-581-1187 FAX.092-592-3848



本カタログにおいて掲載の写真は筆者をはじめ他のお客様より投稿頂いたもので総合的に構成されており、本文内容とは直接的に関係のないものも含まれます。また掲載の場所などに関してはご質問にはお答えできませんので何卒ご容赦くださいますようお願い申し上げます。カタログで紹介しているアイテムの価格は変動する場合がございますので明記しておりません。最新の価格はホームページまたはスタッフまでお尋ねください。



釣師の四段階

近くの山女魚釣りからはじまった私の鱒釣り人生は、まさに旅というべきほど、日本各地を釣り歩くまでの趣味となった。いや、実際には仕事にまでなった。日本の鱒は面白い。北半球にしか棲息しなかったと言われるサケ・マス属。特に日本のイワナ、ヤマメ、アマゴ、イトウに代表される固有種は世界的にみても鮮やかで美しく、力強い魅力と深い謎に満ちあふれている。ロバート・ブルース・ロックハートの「わが竿、わが慰み」（1974年・飯田操訳）によると、彼の釣りは四段階あったと言う。まずは数のみを喜ぶ少年時代。それから大きさを求める青年の時代。この時期を彼は利己的で、つまらない自尊心だったと述懐しながら、次に、釣り上げる技に洗練した楽しみを求めた壮年時代がくる。そして晩年の時代が最も幸せだと言った。それは体力の限界を知り、自らが釣るよりも他人が釣ることを喜びとし、釣りと自然の美しさと、なにより心の静けさを学ぶ瞑想のつり人の時代を送っている。と結ばれる。ところで今の私は中年の壮年時代なわけだが、節操なく少年も青年の時代にもまだまださまよっている気がする。いやロバートも、壮年の釣り方に拘る時代において、たとえ同じ鱒を釣っても新たな発見する数の少年時代や大きさの青年時代を行きつ、戻りつとしていたのではないか。つまり、それはいつもなにかを試すという、小さな挑戦のある週末の鱒釣りの姿である。壮年の時代、仕事に明け暮れる毎日から解放される孤独の溪は我々をいつでもタイムスリップさせ、わがままな欲望も傷みも癒してくれる。そんな川が日本にはたくさんあるのです。



鯢

Hucho perryi

イトウ

日本固有種の淡水魚で最大となるイトウ。もちろん鱒族の中でも川の王と言っていい存在だろう。現在の分布は日本では北海道だけとなり、絶滅も危惧され、九州のアカメのようにいつ釣りが禁止となるかもしれない。しかし鱒狙いの釣り人からは絶大な人気を誇り、北海道では放流もして観光資源とする動きも出てきたので、これはぜひ応援しなければならない。つまり、遠くからイトウを釣りに行き、日帰りなどはせず、宿に泊まり、旨いものやお酒をたくさん飲んで楽しく過ごせばいい。そして幸運にもイトウに出逢えたならば、またきちんと水に戻す技術が必要であり、それは旅の前から知識を持ち、身につけておきたい。そしてカスケットスタッフの古和康平が人生で初めてのイトウを釣りに出かけた時の話である。

幻

の魚イトウ。最初にそう聞いた数年前、正直僕はその言葉にあまり関心が無かった。いや、正確に言うともちろんいつかは釣つてみたい夢の魚ではあったけど、あまりに縁遠く感じていて、しつかり考えた事など無かったのだ。

日本に住む鱒族の中でも最も大きくなる魚、そして九州に住む僕にとつては、日本で一番遠い場所に住む魚。その巨体が川の水を堰き止めた話や、湖で熊を飲み込んだという伝説なんかも聞いた事がある。いつかは・・・なんてぼんやり考えてはいたけど、実際あまり現実的に考えていなかった。そんな僕がイトウに興味を持ったのは、手島から聞いたこんな一言がキッカケだった。「北海道で鮭が取れなくなったり、ブリが釣れたり、イトウはこの先いつか日本では釣れなくなるかもしれないよ。」とてもショックだった。本当に幻になるかも知れないなんて。その言葉を聞いて、初めて現実的にイトウという魚についてもっと知りたい。そう感じた。

調べて見ると、イトウは鱒族どころか淡水魚として日本最大の魚。大きな物では1m以上、これまでの記録では2m以上の個体も確認されている。ただし成長が遅く、産卵が可能になるまでにとても時間がかかる。そして、産卵を行う河川最上流域までの移動距離が長いため、河川改修などの生息環境の悪化の影響を受け易く、その数が激減してしまった事などがわかった。

現在は北海道内の自治体などの呼びかけやキャッチアンドリリースの励行等で、その数が保たれているとの事。まずは関心を持ち、知ろうとする事がイトウを幻の魚にしない為の第一歩だと知った。

そして調べれば調べるほど、イトウに対する興味、この手で釣つてみたいという想いがどんどん膨らんで、憧れとなつていった。

だけど、旅行でも行つたことのない地へ、魚を探して旅

をする？それも九州の真反対側、北海道だ。いや中々簡単ではない。憧れは持ちながらも、その一歩がどうしても踏み出せずにいた。

そんなある日、手島が夕食会の席で、僕に話し掛けた。「今年、一緒に北海道行つてみるかい？」またとないチャンスだ。僕は手島の気が変わらないうちに即座に「行きます！」と答えた。あとは勢いだ！

かくしてイトウへの挑戦が決まり、僕は今、日本最北端の地に立っていた。朝方、気温1℃。車の窓ガラスが凍っている。ホテルの方曰く、先日からの寒気で一気に気温が下がつたらしい。こんな状況で魚の活性は大丈夫だろうか？さすがに不安がよぎつたが、すぐに考えるのをやめた。ここまで来たんだ。状況がどうだって、やるしかないじゃないか。

期待と不安が入り混じる中、車を走らせる。左手にはオホーツク海、右手には北海道らしい広大な景色が続いた。しばらくするとイトウが棲む湿原が見えてきた。どこまでも続く葦原に、ウイスキー色をした緩やかな流れの川。九州にはない、独特の雰囲気だ。

通常、溪流や湖であれば魚のチェイスが見える事も多い。だけれど、タシニンウォーターの川は透明度が低いため魚が掛かるその瞬間まで姿が見えない。つまりミノーを泳がしてビックアップ寸前まで、いつ魚が来るかわからないのだ。今か今かと、その時を待つ。それが一層僕の期待を高めた。

釣りをしていると時折、バツシャアつと音が響く。振り向くと、音の後にフワツと赤味がかつた尾鰭が翻した。ポイルだ。いる。ここに間違いなく、あのイトウが居るのだ。

河川に着いて何度かイトウのポイルを見た。そして二つ、あることに気づいた。その中でも一際大きなポイルを起こしている奴がずっと同じ場所で捕食を繰り返している事。

勿論狙わない手はない。すぐにその場所に忍び寄り、ミ

ノーを通した。

しかし、全く反応は無い。何度投げてても、何を投げてもダメだった。さすがに甘くは無いものだ。しばらくすると、そいつはまた同じ場所で派手なポイルを起こした。僕はすでに降参して隣のポイントに攻めていたが、今度は手島がそのポイントを攻めに行つたようだ。僕が立っている位置からは、生い茂る草で手島の姿はよく見えない。

そして僕が自分の釣りに戻ろうとした瞬間。静かな流れの川に、まるでバケツをひっくり返したような、けたたましい音が響いた。同時に手島の居る方向から「ネットー！ランディングネットー！」という叫びが聞こえた。そうだ、ネットは僕が背中に着けているのだ。一度土手を上がつて先ほどのポイントに戻ると、手島が手にしているロッド「バルキーバック」が大きく弧を描いて曲がっているのを見て、その魚の大きさを感じた。しばらくして水面に姿を現した魚は、想像以上にデカイ。震える手の重みが手に伝わる。ホツとして手島と顔を見合わせ、ガツチリと固い握手をした。

僕が人生で初めて目にしたこのイトウ。サイズを測ると101cm。見事なメーターオーバー、まさに湿原の王者と呼ぶに相応しい風格だった。

写真を撮る時、僕は驚きと感動で緊張していたけど、イトウは臆する事なくドッシリ構えているように見えた。撮影を終え、手島がその魚体からそつと手を離す。イトウは何事も無かつたかのように堂々とその尾鰭を振りながら、ウイスキー色の川の中に消えていった。



湿原の笹藪をかき分け、イトウの波紋にルアーをジャストな位置に投げ込む。岸沿いを動くイトウに対して、ボサに掛かればもちろん、岸から遠くても掛かることはない。

まさにマッチザベイトの勝利だった。トラッド60mmのワンキャストでこのイトウは口を使った。水中深くで暴れるイトウの波紋が水面まで波を打たせる動きとなって足下に到達したのには興奮したし、心底から息を呑んでしまった。





手島が虎のような顔だと言った。ラインから繋がる、うごめく水面の大きさと引きの強さを思い返しなら、大きく息をするイトウは僕も魚というより、猛獣のような気さえしていた。



毎年狙ってメーターオーバーのイトウを仕留める片岡氏。歩きにくい河岸を足で稼ぎ、時には湿原の藁のようにじっとして最も口を使いそうなルアーを選び出す。イトウを抱く手が優しい。



道北でイトウとともに育ってきた川村謙太郎さん。手島の古い友人で僕にも親切に教えてくださったのが嬉しかった。次頁の飽張りのバスプーンは川村さんから初イトウの記念に頂いたもの。グイグイとソルティスベイスайдを曲げて僕をハラハラとさせてくれたイトウ。今でもあの興奮とヒヤヒヤ感を覚えている。何度思い出しても口元がにやけてしまう。魚を釣った記憶は少しずつ次の魚で色褪せていくものだけど、初めてのイトウは別物なのかもしれない。これほど記憶に残る魚を僕は未だ知らない。

その一步を踏み出せば無理なことではないように思えた。僕のイトウ初挑戦。



た。感動の二匹目だ。もちろんこれまで釣った鱒の中で最大のイトウだ。親指より大きな脂鱗、巨大な尾鱗。両手で支える程の鱒、すごい存在感だった。魚釣りはもちろん大きさだけではない。だけど、やはり「大きな魚を釣る」というのは釣り人にとって価値のある事なのだ。帰りの道中、肩に食い込む50Lバックパックの重さも、全身を襲う疲労も、その全てが充実感に包まれていた。そして飛び立つ飛行機から見える北海道の大地を見ながら想い返す。本でしか見た事が無かった魚、自分には遠い存在だと思っていた魚をこの手で抱いたのだ。そう感じると、自分の世界がどこまでも広がって行く様な気がした。これまでなら考えもしなかった事も、無理だと諦めていた事も、イトウを釣る事が出来たように、一步を踏み出せば、きっと無理な事なんて無い。イトウが僕にそう教えてくれたのだ。

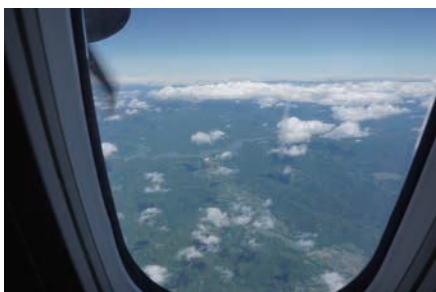
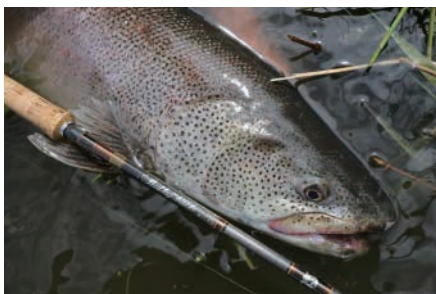
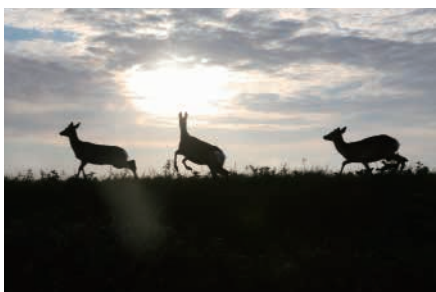
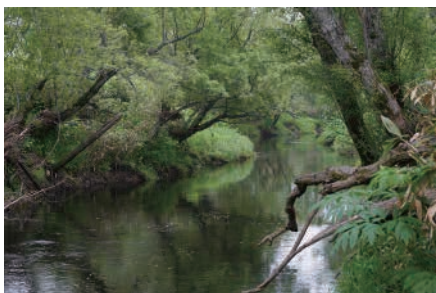


文：古和康平

カセットスタッフ、古和康平。トラウトとカメラと蘊蓄が好きな彼はイトウを釣り上げ、今年は調子に乗ってフライにも挑戦。もうじき一児の父になる。



僕にとって衝撃的なイトウとの初対面に暫し呆然としてしまったが、そんな暇はない。時間は限られているんだ。次は自分の番だと言いかせ、信じて投げ続ける。注意深く川を観察していると、岸沿いで小さくボイルが起きた。慎重に、念入りにミノーを通す。3投目、ドスン!! 突然竿先をひたつくるような重さを感じた次の瞬間、これまでの鱒釣りでは感じたことがない程の引きがロッドを曲げた。バラしたら次は無いかもしれない。何度も何度も自分に「落ち着け、落ち着け・・・」と言いかせる。水面付近まで上がってきてやっとその姿が見えた。間違いなくイトウだ。ネットを引き抜き、タイミングを伺う。相手の動きが一瞬止まったのを見計らって、ランディング。緊張しっぱなしだった体の力が一気に抜けた。時間にして1分ほどだったかもしれないけれど、人生で最も長い魚とのファイトに感じた。上がってきたイトウを両手で支える。サイズを測ると63cm。銀色の体に緑灰色の背中、顔にまで散りばめられた黒点。そのどれもが、写真で見ると遥かに美しく、力強い。嬉しくて、一緒に川に浸かりながら、しばらくその魚体を眺めていた。そして写真に納めてから大切にリリース。元気に帰って行った。その後も時間が許す限り投げ続け、さらに76cmのイトウを釣り上げた。ただ巻きリトリープ中のMP145がゴゴゴと音を立てて止まったと思うと、グワングワンと首を大きく振る。流れに乗って一層重たくなるロッドを必死に支えなければならなかつ



イトウに魅せられた男達がこの地に通う。これほど記憶に残る魚を僕は今まで知らない。プロペラ機も初めてだったし、熊が出そうな見通しの悪い湿原はおっかなびっくり。茶褐色の川に透明の塩ラーメン、朝焼けに躍り出た鹿の親子。九州育ちの僕にとって北海道は見るもの感じるもの、そのすべてが旅だった。

桜鱒

Oncorhynchus masou

サクラマス

サクラマスはサケ目サケ科に属する魚で、ヤマメの降海型である。河川やダム湖に残留する陸封型も存在し、溪流で一生を過ごすヤマメよりも最大 70cm とはるかに大型になる。海に下ったサクラマスは銀鱗の大砲型の身体となり、2月頃から河川の遡上を開始し、桜の時期にピークを迎える。溪流のヤマメと比べて、非常に喰わせるのが難しく、釣れた時の喜びは昇天するような興奮と満足感を与えてくれる。そんな難しいサクラマスを春に何匹も手にする釣り人がいる。サクラマスが遡上する川の畔で暮らす竹内義貴氏だ。北陸サクラマスと毎日のように対峙してきた彼に「最近のサクラマスの狙い方」を聞く。



(写真上) 土手上から様子見でちょっと投げ入れたミノーにサクラマスが口を使った。駆け下りて、あわててファイト開始。サクラマスは難しくもあり、喰ってくる時はこんなものだ。しかし、これ以上暴れさせたくないのだ。

(写真下) ソクツ、鉄板のような銀色の頬に黒い瞳の眼光がギロリ。これだ、この眼に僕はいつもやられる。ロッドはバルキーバック、トライアンフ、スベイスайдを河川規模や場所によって使い分ける。



雪

代が入り増水した太く重い流れが、堰堤を壊すような勢いであふれ出し、轟々と唸りながら僕の前を通り抜けていく。下流には突き出したテトラ帯があり、そのテトラを削り取るよう蛇行し、急激に絞り込まれた流れはさらに勢いを増す。

昨日巻き変えたグリーンのPEラインが、テトラ横に出来た小さなヨレに突き刺さり、白濁した水面にどんどん吸い込まれて行く。キツ目に締めたセルテート2500Rの、ドラグ音が途切れること無く鳴り続け、未だ一瞬の息継ぎさえ許してもらえない。ラインがテトラに擦れないよう、目前の激流の壁ギリギリまで立ち込み、思いつきり腕とトライアンフ83を突き出す。足はガクガク手もブルブルで心臓バクバク、ラインは50m近く引き出され、ただただその場で耐え悶えるだけの状態が続く。追従したいがテトラ帯がゆくてを阻む、踏ん張る足も突き出した腕も限界が近い、でも相手だつて限界が近いはず、お互い分かっている、焦れた方が負けるって。全神経が腕からロッドへラインを伝って相手に注がれる。全思考があらゆる情報を受取り分析し打開策を練り上げる。

楽しい、楽しすぎる・・・。

この日僕は、富山県黒部市を流れる国内屈指の急流河川である黒部川に来ていた。初めての川で右も左も分からずに、黒部ICを降りてすぐ適当に川に向かって着いた場所、そのわずか3投目でこのビッグファイトですから、今後を思うとニヤけが止まらなかったのです。

翌週も期待に胸を膨らませ鼻息荒く同じポイントへ、朝霧の中浮かぶ景色が僕を愕然とさせました。

先週あったテトラ帯が完全に水没し、上流の堰堤も白泡の底、河原も全て消えていたのです。

途中でお会いした地元のアングラーに尋ねると、今年は

特に水量が多いと話してくれました。黒部川の下流サクラマス遊漁区間の水量は、上流の宇奈月ダムからの放水量がその全てで、通常はダム放流量40t〜60tがベストなんだとか、先週のすごい激流が80tだったのに対して、この日は何と120t！しかも、この日だけの異常水量なのかと思いきやそんな事は無く、この年はサクラマスシーズン終了まで、宇奈月ダムからの放流量は連日100t超えが続き、横に流れ落ちる大滝のような激流に大苦戦を強いられ、ニヤけは完全に消え失せ顔面蒼白に。でも、この黒部川での経験が、今の僕のサクラマス釣りにブレイクスルーを起こそうとしています。

ブレイクスルーなんて言ってもどうってことはない、ただダウンでゆっくり流すだけなんです。黒部川は下流域でも大きく丸い石が川底に沈み、激流の真下でも大石のヨレスポットが多数存在し、サクラマスの絶好の着き場所となっている。そこへオリー通りクロスやダウンスで投げても、流れにルアーが押され思うポイントに流せないうえ、ヨレをあつと言う間に通過し喰う間を作れない、それでも時折高活性の奴はギラッと一回転するが、ルアーが遥か後方では掛かるはずも無く悔しいだけ・・・

そこで黒部川で試したのがダウンの釣り、ヨレに着いたサクラマスにじっくりとルアーを見せる事ができ、さらには1投で複数のヨレスポットを通せ効率的、このおかげで何とか満足の行く黒部釣行となりました。

今シーズンはホームでもダウンがお気に入り、まだまだ模索中ですがこんな感じでやっています。川幅の狭まった瀬頭に立ち込み、狙うスポットよりやや流心側にロングダウンにキャスト。糸ふけを取りつつ着水したらラインが水に貼り着かないよう高くロッドティップをキープし、リールを巻かずルアーをポイントへスイングさせ、流れの筋を縦にゆっくり引き戻してくる。そのまま巻いて来ても横波に煽られて岸に寄って行くので、立てたロッ



残雪の川に朝日が昇る。冷たい凛とした空気の静寂。この流れのどこかにサクラマスがいる。



活性の低いサクラマスに スイッチを入れる。

りの高確率で反応してくれる感覚があります。現に今シーズンはヒット数が例年の3倍近くありました。

サクラマス釣りに限らず釣れる理由のほとんどは、活性(時合)と言われればそのとおりですが、僕は川辺で二人推考する時間が大好きです、その推考が事実として証明できると最高にうれしい。

今シーズンのダウン釣りのヒット率の高さの要因を、僕なりに実際の経験から推考してみると、クロスキャストからのU時で釣れた鱈は、フックがかんぬきにしっかりと掛かっている事が多く、ダウンの方はリアフックのチョン喰いが多いうえ、掛かっても合す前のバラし率が非常に高い。この掛かり方から、ダウンの方が低活性のサクラマスもルアーに反応しているんじゃないかと？

では、低活性のサクラマスが反応する要因は？一つにルアーを見せる時間の長さがあると思います。例えばサクラマスの活性を立方体にしてみ

る、鼻先に付けた立方体の中がルアーに反応するエリアとし、クロスしてU時のトレースラインとダウンとで、立方体の中のルアー滞在時間を想像してみる。立方体が2mの高活性時であれば、その中をU時でターンさせるのも容易ですが、立方体が50cmくらいだと、ルアーのターン速度のコントロールは難しく、立方体の中のルアー滞在時間は極僅かとなってしまいます。ダウンの場合はルアーがギリギリ動く速度で巻けば、立方体の中のルアー滞在時間はかなり稼げますね。また、流れのキワにサクラマスが着いてると想定すると、ポイントの流れに沿って点在する事になり、クロスで狙う場合はキャストを50cm間隔で続ける必要があります、仮に10mのエリアなら20キャスト必要、ダウンの場合は点在する立方体を、縦に線で繋いで行くようにトレースするので1キャストで事足ります。少ないキャスト数で多くのポイントをやつくり探れる。高効率。高ヒット率となったと仮定してまず。ただ、この仮定はかなり条件が限定的で、流れの筋が複数ある下流域やゆつたり流れる大淵なんかは、逆にクロスの方が効率がよい場合が多いです。

黒部川を経験する前の僕は実績のあるポイントや、その河川の大場所、釣果情報の多いポイントへ行き、その場に合わせた釣方を選択していましたが、今は逆にダウンがハマるポイントのみを選択しています。選択の基準が変わると川の見方も変わり、今まで素通りしていたポイントが好ポイントになったり、ポイント選びに迷いが無くなり、ただでさえ効率の良いダウンがさらに高効率となつて好釣果となる。これが僕の中で起きようとしているサクラマス釣りのブレイクスルーです。

冒頭のファイトあの後どうなったの？ですが、サクラマスはテトラ帯前の激流を下りきった淵尻で定位置。相当疲れたのかほとんど動かない、どうやら僕が我慢比べに勝利したようだ。こうなれば後は慎重に下るのみ、一旦上

流へ移動し手前のテトラの上にラインを渡らせてから、ゆつくりテンションが緩まないよう下流に移動し、テトラを1つずつ慎重に乗り越えていく。これだけのファイトでフックが外れないのだから、淵まで出てしまえばネットインはすぐそこ、何度かの抵抗はあったものの最後はすんなりサクラカーブにおさまった。体力の限界まで暴れただろうに未だ鋭い眼光を放ち、大きく息をしながら僕を睨みつける。大きく盛り上がった背中と異常に大きな尾びれ、俺が黒部鱈だーって感じの見事なサクラマスでした。

この日は本当は釣りの予定では無かったのですが、大きく水が動いたのでどうしても行きたくて、妻に「コラーゲンたつぷりで美味しいゲンゲの唐揚げが富山にあるらしいよ、行く？」って、誘うと「コラーゲン！」ってすぐに乗ってきた妻、ナイスアクションバイト！おかげで素晴らしい鱈に出会う事ができました、おまけに写真撮影してもらい感謝。(プロフィール写真)

追記 この後、ちゃんと約束通り魚津の駅前にある「海風亭」でゲンゲの唐揚げを食べてきました。ゲンゲの見目はさておき、味はとても美味しかったですよ。



文：竹内義貴

金沢片町の婦人服アンドゥのオーナー。金沢美人の奥様と美人三姉妹、そして若い女性スタッフに囲まれて羨ましい生活を送る氏だが、独り川辺でサクラマスに向かい合う時間が最も幸せな時間らしい。意外と寂しいのね。

異国の鱒達



北海道、支笏湖。モンスターともいわれるブラウントラウトがこの湖の岸辺を泳いでいる。全国屈指の水の美しさの中で大型の鱒が狙え、周囲には温泉やキャンプ場、宿泊施設もあり、素晴らしい自然と体験を満喫できる。こんな場所が全国にいくつもあれば嬉しいのに。



外来鱒の価値観。



外来鱒は本来、移入種であったはずなのだ。現在は侵略的外来種と呼ばれるものが多く、はるか遠くから連れられ日本に放された鱒はえらい迷惑だと思うのだ。つり人立場では大きな外国の鱒が釣れるのは嬉しくないことはない。しかし外来鱒でヤマメやイワナが姿を消すような事態になったらどうだろう。喜んでばかりはいられない。こうした問題には個人ではどうしようもないから行政や保護団体が結成されてから具体的な行動が始まるだろうが、つり人の身勝手なゲリラ的放流だけはいけない。これは絶対にしてはいけない。そして同時に狩猟本来の楽しみであるキャッチ&イートも考えて欲しい。虹鱒は美味しいよ。そうしたらその水域の環境にも心を配れるはずなのだ。箱根駅伝の山道を自転車で上り、異国の鱒を釣るといふ贅沢を幼い頃から体験してきた宮澤豊氏。在来種の保護とバス書魚論を雑誌編集部時代に直面した。慣れ親しんだ異国の鱒達との今後のあり方を語る。

エ

リア(管理釣り場でイトウやサクラマス、船からイシダイ、ライギョをオープンウォーターで釣っても気持ち盛りが上がらないのと同じで、釣果だけでは満たされないアングラーにとつては、ウレシくない釣り“というのが存在する。アングラーにはおおまかに分けて「なんでもいから、釣れば楽しい」という人と、「自分のイメージ通りに釣りたい」という人がいる。仕事であれば、楽しみは二の次ということになるが、釣りは趣味なので、本人が楽しいと思えばどちらでもいい。だが、「なんでもいい」という釣りは、食べ放題の焼肉のようで、年齢を重ねると、徐々にキビシクなってくる。若いころは食欲を満たすために、腹いっぱいになればなんでもよかったが、食事を“楽しむ”ことができるようになると、ちよつとしたこだわりがでてくるものである。おいしい赤身が食べたい、とか。

元々は食用として1925年、大正14年にはるばる海を渡ってきたブラックバス(ライジマウスバス)は、現在法律によって生きたままの移動や飼育することが禁止されている。また、県によっては条例でリリースが禁止されている。ただ、それとは逆に芦ノ湖や河口湖、山中湖、西湖では、バスを釣るために遊漁券が必要となり、漁協は券を売った収益によって、バスの個体数を維持するために、放流や産卵のための禁漁区を設けるなどの処置をしている。ボクたちの身近なターゲットであるレインボートラウトやブラウントラウトは、バスほどの規制はかかってない。ただ、人間のために海を渡ってきて、人間の都合で生息域を広め、人間が決めた法律によって駆除が行われる可能性がある。

レインボートラウト。ニジマスのことであるが、日本に移入されたのは1877年、明治10年。太平洋東岸、カムチャッカ半島が原産のサケ科サケ属の淡水魚である。近年は染色体操作によって、ドナルドソン(ニジマス×



スチールヘッド)、信州サーモン(四倍体ニジマス×ブラウン)やニジノスケ(ニジマス×キングサーモン)などの交雑種がいる。関東ではエリアフィッシングでメインのターゲットになっている魚であり、盛んに養殖が行われている。食用としてボビュラーで、鮮魚店で見かけ、旅の宿泊先の膳に並ぶこともある。

ブラウントラウト。サケ科タイセイヨウサケ属で、ヨーロッパ原産の魚である。日本への移入は1892年、明治25年。ブルックトラウト移入の際、その卵に混じっていたとされている。その後、日本各地で養殖された。ブラ

ウンもレインボーと同様に、タイガートラウト(ブラウン×ブルックトラウト)やパールトラウト(ブラウン×ヤマメ)などの交雑種がいる。定着性の強い魚なので、自分の縄張りに入ってきたルアーに対しての反応がよく、大型のミノーでも釣れる魚として人気がある。

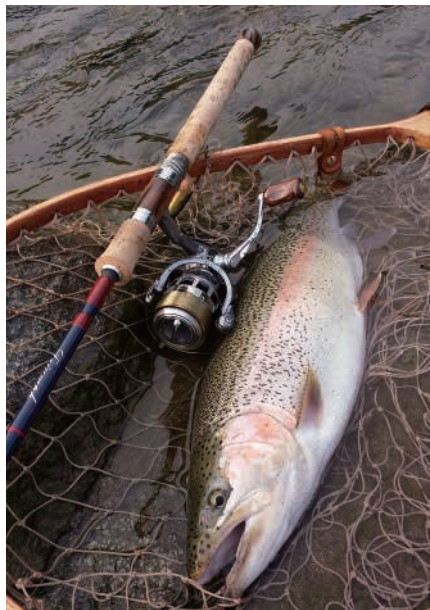
レインボーやブラウン(交雑種を含め)などがバスと異なる点は数多くあるが、最も大きなことは、食べるとうまいことだ。まずい魚は増えることはあっても、おいしい魚は増えない。ソウギョやレンギョがおもしろかったら間違いないく増えていないし、サクラマスやビワマスがまずかったら絶対に増えている。ちなみに、エリアで釣ったブラウンを食した人には不評であるが、以前中禅寺湖で釣ったブラウンを食べた人に聞くと、たいへんおいしかったそうだ。エサや育った環境によって味が変わるという典型的な例だろう。バスが増えたのは、食用として移入されたのにもかかわらず、食べる人がほとんどいなかったからである。極論を言えば、食べておいしい魚であれば、保護する方向にあつたし、ここまで問題になる魚ではなかった。いずれにせよ外来種の問題は、これからさらに深刻になることは間違いない。また、外来種に限らず、日本の固有種であるイwanaやヤマメ、アマゴも放流によって生息・分布域が昔とは大きく異なっていることが問題になっている。食糧難の時代には、湖や河川の近くに住む人の感覚としては、そこが貯蔵庫のような存在で、食べるための魚が近くにいればなんでもよかったという。故に漁協によって無計画な放流が行われたり、自主放流がされてきた。アングラーは、身近なところでたくさん釣れたほうがいいという考えを持っている人が多いだろう。ただ、そういった考えが、結果的には人間の都合で魚を駆除することに繋がる。イトウに会うために北海道に行く。レイクトラウトを釣るために中禅寺湖に通う。ブルックトラウトを釣りに日光・湯川へ行く。イwanaを求

サで10%。ルアーだと3%しかない。それでもあえてルアーを選ぶ。なんでルアーで釣ろうとするのかが大切なんだ』と、世界最大のルアーメーカーであるブラドコに在籍する、ヒロ内藤さんは語っている。単純に釣果だけを求めれば、他の釣り方でもいい。ルアーフィッシングを選んだのには、それ以外のことがあるからなのでは?例えば、ルアーフィッシングと旅をセットにして楽しむ。イトウやレインボーなら北海道の河川、ビッグブラウンなら支笏湖、中禅寺湖。サクラマスなら東北、北陸の河川。バスはやつぱり芦ノ湖(風景が好きなのでトラウトを釣ってもウレシイのが芦ノ湖だが)。それが日帰りのショートトリップになる場合もあるが、宿泊先を変えた長期遠征になることもある。これは神奈川を拠点としているボクの勝手なイメージではあるが、自分が理想とする風景の中での釣りをするために旅をする。釣れればどこでもいい。という考えではなく、そこで釣れてこそ、自分の釣りが完結する。そんな物語を作るのもいいのではないだろうか。本能だけで生きる野生動物と違って、食べることを「楽しむ」のは、人間にしかできない。釣りを「楽しむ」のも、人間ならではのことであれば、楽しむために「なんでもいい」という考えは、捨てるべきだと思う。釣りは狩猟本能に由来するものと語られることが多いが、本能と切り離すことに、本当の釣りがあるのではないか。



文：宮澤豊

関所があることや箱根駅伝で知られる芦ノ湖で貴公子と言われた宮澤氏。こんな四角い貴公子には出逢ったことがないよ。現在は神奈川県藤沢市の伊勢原釣具の主人。



群馬県沼田榛名神社の敷地内にあるフランス料理・樹葉亭はトラウトフィッシングが好きなシェフ笹刈哲氏が、時折、鱈料理のコースを振る舞ってくれる。

めて源流を目指す・・・など、アングラーが求める風景にマッチした釣り、そこで釣れる魚は美しい、とボクは勝手に思っている。また、生息数が少ない魚に対しては、狙わないという選択があってもいいと考えている。「釣れればなんでもいい」という安易な考えは、その釣りを長く、そして本当に楽しむためには、取り除くべき思考だと思う。憧れているビッグレインボーやブラウンが「こんなところで釣れるの!？」というフィールドで釣れるとショックだ。レインボーであれば三面護岸の河川ではなく、ゆったりとした流れのある川で釣れてほしいし、ブラウンであれば濁った池のような狭いところではなく、自然豊かな広大な湖で釣れてほしい。レイクトラウトが中禅寺湖以外の湖で簡単に釣れると言われても、なんだかなあ・・・と思ってしまう。ボクが大好きなブラックバスは、世間からは「在来魚を食い荒らす悪い魚」といわれている。何度もうが、バスは人間の都合で「悪い魚」になった。バスが芦ノ湖にしかない魚であれば、そうは言われなかったはずだ。ブラックバスという幻の魚を釣るために、遠方から芦ノ湖を訪れる人がいただろう・・・。ただ、最初は釣れるから行っていた人も、やがて釣れなくなると芦ノ湖には行かなくなる。結果として、そこにアングラーが訪れることで生計を立てていた人は生活ができなくなる。釣れないと、釣り場に人は来ない。だから釣れるようにすべきだという考え方に行き着く。だが、時代は変わるべきだ。『魚が反応する確率というのは、生工

天女魚

*Oncorhynchus masou
ishikawae*

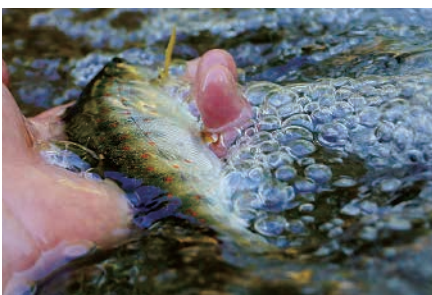
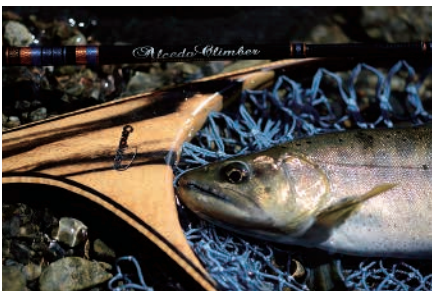
あまご

アマゴの天然での分布域は神奈川県西部以西本州太平洋岸、四国、九州の瀬戸内海側河川の一部であり、やはりヤマメとは異なる側線上下に見られる朱点の際立った美しい個体に出逢いたい。アマゴの降海型はサツキマスと呼ばれ、サクラマス同様に陸封型も存在する。名の通り、桜よりやや遅い皐月の花の頃、遡上する。こうした日本固有種を強く感じる名前が誇らしい。しかし、近年はヤマメ放流事業により交雑が進み、朱点の濃いアマゴが減っていると言う。ぜひ一度は純血を感じるアマゴをこの手にしたいものである。郡上の田舎で奔放にカッパのように育った子供が大人になった。そして少年時代よりも渓魚に没頭する毎日の滝ヶ平雄太氏が出逢った垂涎の大アマゴの話。

深谷に朱点を求めて



パーマークと朱点の鮮やかなあまごに出逢うと嬉しくなってしまう。降海型遡上の銀鱗のサツキマスにも迫力の朱点を探したい。最近では純血の朱点の多い個体が減っているのではおさらあまごを大事に思うようになった。



ついこの間までサクラマスの解禁日を待ち望んでいたような気がするのに気がつけばあと半月で今シーズンも終わりというところまで来ていた。まだまだ行きたいフィールドはたくさんある。結局行けなかった隣の湖、イワナ天国の山岳溪流、地元を流れる溪流だって綺麗な鱈に出会えるところばかりだ。どのフィールドへ行こうか悩んだ挙げ句、少し足を伸ばして遠征してみようと選んだ小溪流に行き着いた9月中旬の釣行記。

首元をひんやりとさせる朝の空気は、まだ緑色をした辺りの広葉樹を少しづつ秋色へ染めつつあるように思えた。

なんとか良い魚で締めくくれないなあ・・・なんて心配していたことを払拭するかのようにけたたましいドラグ音が小さな溪流に鳴り響いた。

この日は前々から気になっていたポイントを数カ所探るも、良い反応を得られないまま最後の場所へ足を運んだ。そこは流速の早い瀬頭が長く続き、徐々に開きへと移り変わるこの溪流の中では比較的たつぷりとした水深のある淵だった。アップヘキャストしたシンキングミノーを流れに馴染ませこの淵の核心部へと送り込んだ瞬間、何かが『バコッ』と体の側面をこちらに見せつけた。

瞬時に水面を紅ともピンクとも言えない色へ染めたその鱈が放つオーラは、どこか神々しさすらも感じた。フックを外そうと何度も大きなヒラを打ちながら泳ぐその鱈はイワナではなく、ものすごい体高をもった雄アマゴだ。ヒットと同時に上流側の深みへ走りドラグを鳴らすのを精一杯受け止めたが、その時僕が握るロッドにはどう考えたって似つかわしくない大きなアマゴだった。

しかし、小溪流の淵でのヒットなので魚を下らせない

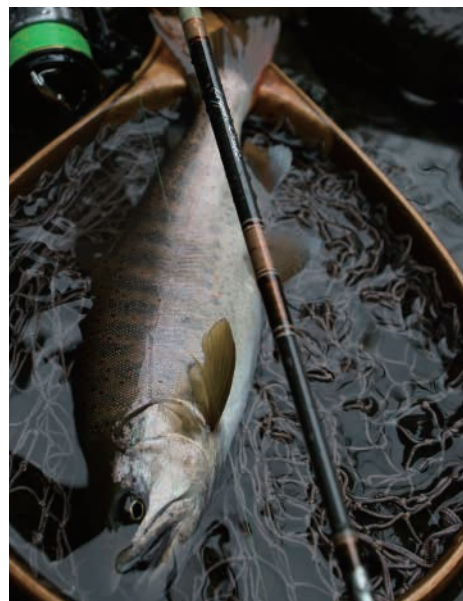
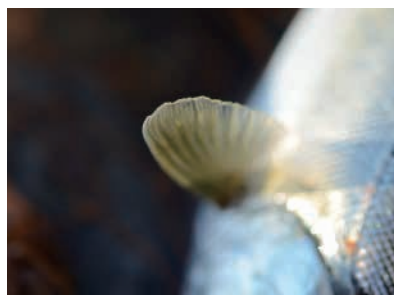
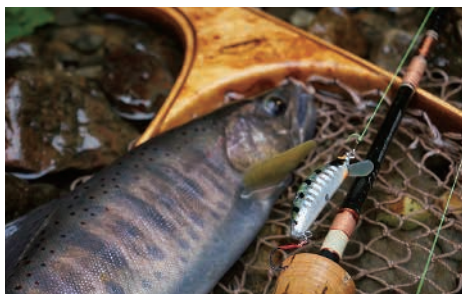
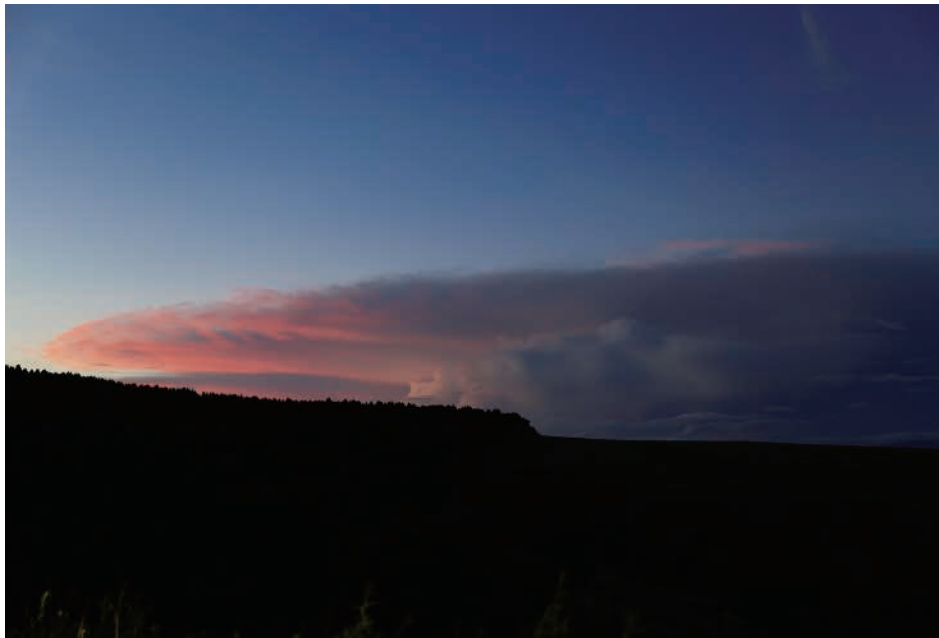
ように気をつければ獲れるかも知れない。最後のひと暴れが最もバラシのリスクが高くなる。自分の感情を押し殺しながら相手の体力を奪う事に専念した。体力を奪えるまでは一定の距離を保ち、ローリングを押さえ込むようにロッドを寝かせて耐えた。寄せては走られを何度か繰り返したところで徐々に弱り始めたが、朱色に染まったそのアマゴは普段見ている酸欠に弱いアマゴとは異なり、異常なまでに生命力が強いように思えた。少し魚が寄ったところで針掛りを確認すると、ベリーとテールのフックをしっかりと啜えているのを確認できた。

フックの掛かり具合を確認すると同時に目に飛び込んだのが、強烈なまでに顎が発達したアマゴの顔だった。幼い頃から何度も川へ通い詰めて、何度も何度も夢にまで描いてきた魚が、たった0.3号のPEラインを通して自分の前に必死の抵抗をしながら泳いでいる。

本能の朱色。

緊張感を通り越して、異常なまでに落ち着きを取り戻したところに勝負はついた。ランディング時にはかなり弱らせたつもりだったが、ランディング後にまた大暴れた。まだこんな体力をもっていた事に驚きつつ、魚が落ち着いた頃に静かに浅場へ横たわらせた。この魚なら一日ここで眺めていたって良い、そんな事思った。紅すぎることもなく、黒すぎることもない理想とまで言い切れる婚姻色を纏った雄アマゴは52cm。鮭のような





文：滝ヶ平雄太

岐阜県郡上のカッパの子。今でも地元で兄弟のような友人と踊ったり、川で遊んで過ごす週末。最近では山から下りて大海原にも出るようになった無類の釣り好き、魚好きである。

2016シーズンは幕を閉じた。また、鮭やサクラマス、サツキマスは母川帰率が100%に近い事で知られている。このアマゴも同じ様にこの小さな川で生まれ、3年の時を経てここへ還つて来たのだから代々受け継がれるDNAに刻まれてきた本能の凄さを思い知らされる。来年も、再来年もこんな奴が廻つて来てくれるかもしれない。そんな期待に胸を膨らませながら早まる夕暮れとともに僕

の牙を纏った口元からフックを外し、酸素を確保できるところへ移動させた。恐らくこの魚は下流のダム湖内で成長し、秋を少し前にして早めに遡上した魚だと思われた。魚を見ている際に、ふとこんな事を思う。アマゴ、ヤマメの寿命は普通で3年、稀に4年の魚もいるが恐らくこのアマゴも3年でこのサイズまで成長している。陸封の鱒でこのサイズまで成長するには一体どのような過程を踏んで来たのかという興味だった。アマゴやヤマメの様な鱗が比較的薄い魚種であれば鱗を数枚を採取し、顕微鏡で拡大して年輪の数や間隔からその魚の年齢や成長過程を確認できることから鱗の採取も考えた。しかし結局はこの鱒に傷を付けることなくただひたすら一人河原で眺めることしか出来なかったのだ。このアマゴがどのように育つて来たのかは少し興味があるけれど、このまま謎でいた方が神秘的なようにも思えた。

きっと若くしてこの天女魚はここま
でになったのだ。素晴らしい速度で
太り、黒くもならず、全身に夕焼けの
雲に映るような紅色と朱点を纏い、盛
り上がる力強い背中、戦うために変形
した鼻曲がりの口先に武器とも言え
る牙を生やしている。

岩魚

Salvelinus leucomaenis

いわな

日本にはイワナの亜種が地方で存在する。これを巡る旅もさぞ面白いだろうと思う。北からエゾイワナ（アメマス）、オショロコマ、オショロコマの亜種で然別湖だけに棲息するミヤバイワナ、ニッコウイワナ、ヤマトイワナ、そして中国地方に生息し絶滅も危惧されるゴギである。イワナは水量の少ない源流域でも棲息し、愛嬌のある魚だ。魚に愛嬌があるとは変な話だが、目が大きく、食欲旺盛な性格で、ヤマメよりも警戒心が薄いのか、よく釣れてくれる。僕は一度、暑い夏にイワナが瀬尻のたるみで岩にもたれかかるように寝ているのを見た事がある。死んでいるのかと近寄ったら脱兎のごとく逃げ出したのである。長年、イワナを追い続けてきた藤井幹大氏だが、最近さらに岩魚棲む山は高く、奥が深いことを発見。いつもの滝を三つも超えて見てきた幻の谷とは？

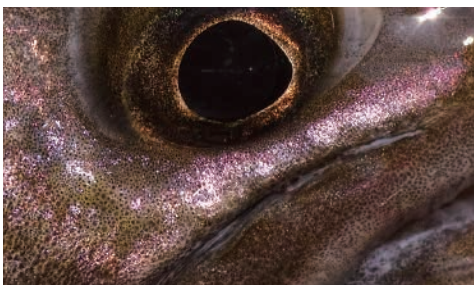


リールを持ち運ぶ時に意外と嵩張るペール。カーディナルはハンドル以外にペールも畳むことができる。破損もし難い。

いつもの溪流を釣り上がり、その日の最終地点。誰しもが思うであろう・・・その上にもまだ魚は居るのか。ひとつ堰堤を越えてみる。次々と現れる美味しそうな淵で純粹無垢な尺岩魚が釣れた。じゃあ、もうひとつ。そんな事を繰り返すうちに岩魚の限界が見たくなり、いわゆる源流へと進む事になるのだった。源流釣りの相棒は角ちゃん。クライミングの技術と実績を持つ、大きな体のタフガイ。熊にも勝てそうなその体は源流釣行の相棒としてはこれ以上ないくらい頼もしい。ヘルメットを被り、ハーネスにはハーケン・スリングにカラビナ、ザックの中にはロープが二本。フル装備でこの谷へ挑んだ。この谷、途中まで角ちゃんは行つた事があるらしいが、その先は不明。よって地形図とコンパスは必須である。八メートルの滝を越えたこの先には岩魚の楽園が広がっているらしいが・・・。林道の最終地点に車を停め、沢登りしながら竿も出さずにひたすら上流に進む。植林された杉林はもはや無く、鬱蒼としたブナの森を突き抜けて行く。いくつかのゴルジュを越え平原のように開けた場所に出るとひと休みしたくなるが、周りを見渡すと踏みつぶされた草や大きな足跡。そう、そんな場所はツキノワグマの恰好の遊び場だったりする・・・。まだらかな尾根が伸びたブナの森で爆竹を鳴らすと、その尾根の上を黒いものが走り去った。

「・・・」

無言で足早に次のゴルジュまで進んだ。一時間ほど進んだ頃からちらほらと岩魚の姿が見え出した。それでもまだ竿は出さない。目指す先はまだ先にある。小さな淵では岩魚のスクールが足下を逃げ惑う。それでもまだ我慢・・・。それからしばらくして三メートル程の小さな滝を越えたところで我慢の限界に達し、ついに竿を出す。ザックの中に仕舞ってあったアルセドクライマーを継ぎ、畳んであったカーディナルをセットして厳選してき



たミノーを結ぶ。厳選してきたと言っても、こんな狭い流れで使うのはワンフックのハスストラッドしか選択肢に無いのだけれど。期待の一投目。あっさりと釣れる。サイズこそ八寸くらいだが、場所なんか選ばずとも岩魚が次々と出てくる。呆れるくらいに濃い魚影に驚いた。その後は大場所だけを狙って進み、九寸までの岩魚を手にしたところで再度竿をザックに納めて先を急いだ。先を急いだのには理由があった。実は台風が迫ってきており、この谷に巨大な雨雲が数時間後に覆い被さる予報だったのだ。こんな日にこの計画は無謀ではあったのだが、事前に地形図でエスケープルートを三本準備。二日分の食料と行動食に加え、ビバークできる装備と予備日を準備していた。それでも当日、十時間の行程を半分の五時間に短縮して行動していた。朝七時に出発し下りに二時間掛かるとして、十時には折り返さなければならぬ。現在九時半、でもその先にあるという滝まで進みたい。あと十五分進んで着かなかつたら諦めようと、急ぎ足で狭いゴルジュを進んだ。そして滝が眼に入ったのはその二十分後だった。慌てて竿を出し準備を終えたと同時に大粒の雨がその滝壺を叩きだした。まずい・・・。直径三メートルに満たない滝壺、水深は二メートルほどか。先ずは表層をミノーでひと流し。数匹の岩魚が襲ってきた。尺上を食わせたとしたら、八寸ほどの元氣すぎる岩魚がミノーを横取りしていた。もう一度、今度は尺二寸ほどの魚体が見えたが色んな焦りで掛けられない。上から見ていた角ちゃんが「デカ



沢登りの道具

場所によりけりだが、最低でもスリング数本にカラビナはあった方が良い。滝登りがある場合、ロープやハーネス、ピレイ器具。それにヘルメットやグローブなど。



〔源流でのリスク管理〕

- 雨による増水に気をつけろ。
必ず地形図で集水面積を確認すること。最寄りの水位計でどのくらいの雨でどのくらい水位が上昇するかをデータとして集める。あとは当日の天気を確認する。
- 行程の時間管理をする。
登り詰めるのか、ピストンするのか。釣りをしたらどのくらいの時間になるのか。余裕をみて行動する。
- 食料と水は余分に持つこと。
カロリーの高い食料を最低一食分は余計に持つ。水は川の水が有るが、動物の生息域では安全とは言にくい。小さな浄水器ソーヤーミニがあれば重い水を持ち歩かなくてすむので大変便利。



■森は動物の住処。
ぱったり出くわして怖いのはとにかく熊だ。常にホイッスルを吹いてこちらの存在をアピールする。獣の臭いが強い場所や足跡がある場所では爆竹もあり。あとはカーブを曲がったらパツタリ！なんて時の為に、すぐに手の届く場所に熊スプレー。問題はその緊急時に落ち着いて対処出来るかどうか・・・だ。ちなみに以前、至近距離で熊に遭遇したときは全速力で逃げた。笑・・・。
熊に出逢っても逃げちゃ駄目と知りつつも・・・。



源流バックロッド

ロッドはザックの中にスッポリと納められる4ピースのアルセドクライマー。もはやこれ以外の選択肢なし。



ルアーとフック

ルアーは岩だらけブッシュだらけの源流では、壊れずトラブルレスなワンフックのハッスルトラッドがベスト。深い滝壺や淵も見据えて、ジャックガウディ Jr. と揃えれば、これで充分。フックはいずれもシングルフック。源流のイワナはバイトも強烈で全く問題なし。むしろトレブルフックはトラブルが増えるだけ。



文： 藤井 幹大

カメラ片手にビールと魚があれば5時間は語れるだろう。10年前なら12時間は語れたらしいが如何せん40を過ぎて酒にも弱くなり、眠りに落ちるのは10時が限界。そして朝は暗い内に起きるようになったという。じ、じいさんか!?

「イデカイ！」と叫ぶ。「余裕で尺超えてるね」と答えると、違う違うと言う。何の事かわからないがもう時間が無い。最後の一投で底を探ろうとジャックガウディ Jr. を底まで沈めてしゃくり上げた。ズシッ！。期待に逆らう結果で申し訳ないが、ものの一秒でフックアウト・・・。もう雨も相当に強くなってきたので、身の危険を感じ大慌てで帰り支度をして足早に川を下ったのだった。もはや悔しいとか考えてる余裕も無し！。時間ほど下った辺りから水が濁り出し水量も増えてきた。二人は無言のまま、とにかく無心で歩き続けた。それからしばらくすると水位が普段の倍くらいになってはいるが、歩き慣れた川に出た。ほっとした二人はようやく声を出した。「さっきの岩魚デカかった。」と角ちゃん。「うん、尺二寸くらいあった。」などと話していたが、どうにも話が噛み合わない。どうやらその尺二寸の下に比較にならないくらいのが居たらしい。

「も、もしやゴーマル?」
ボク達に向かう予定だったのは、今回の滝のさらに奥。その先には更なる岩魚の楽園が有るという。

「源流のゴーマル」
来年は出逢えるのだろうか・・・。
と、今日も缶ビール片手に地形図を眺める。

山女魚

*Oncorhynchus
masou masou*

やまめ

九州ではエノハとも呼ばれるヤマメ。全国の溪流で見慣れた魚だが、つり人にとってひとつの壁である「尺」というサイズを超えると一変する。それは睨みつけるような眼光に頭部から体高を増し、力強い尾ビレに迫力ある体軀になりながらも、宝石の美しさを保持するのである。まさに垂涎のヤマメである。また幼魚斑と呼ばれるパーマークの模様に谷違いや地域差、個体の個性を見るのも面白い。これは一種の擬態ではないだろうか。溪流の岩や小石に擬態する、そうヤマメは美しい溪流そのものの欠片なのだ。平家伝説のある美しい村、椎葉。ヤマメの放流事業も全国屈指。そんなヤマメ棲む谷間で生まれ育ったカスケットスタッフ椎葉茂雄が逢いたい理想のヤマメとはいかなるものなのか。





此処にいれば僕はずっと幸せでいられる。相手は自然だけでいい、「独り」が気分なのだ。木々の隙間から注ぐ陽の光に押されて僕はその先の滝を目指していた。



渓

流の女王、

または溪流の宝石ともよばれる「山女魚」。

水系によりさまざまな容姿を見せる。この魚の魅力に取りつかれている釣り人は多いのではないだろうか？山深い村で育ったボクもその一人だ。そもそも山女魚とは、サクラマスというサケマスの一種でサケ属に属する。一生を川の中で生活するようになった（河川残留型）サクラマスを「山女魚」。一生のうち一部を海で過ごした（降海型）を「サクラマス」と呼んでいる。その他にも湖沼型や陸封型という生活型がある。また山女魚のよび名は地域によっても、ヤマベ、スギノコ、マダラなど。小型の銀毛したものはスモルトやシラメとも言われている。ボクの生まれ育った村ではエノハと呼ぶ。呼び名もさまざまだが、模様はさらに複雑でいつ見ても飽きない。地元でさえも釣り場によって模様が違うのである。背中の黒点がないもの。パーマークが丸に近いものや小判型のもの。パーマークの下に丸い模様をもったもの。秋になると朱や真つ赤に染まるもの。ひとつとして同じ模様のヤマメに出会うことはないのだ。そんな個性をもった魚なので、釣ったヤマメを写真などで見ると、地元のヤマメはなんとなくどの水系の魚なのかわかってくる。さらに凄い人になると、あの谷のヤマメだとピンポイントでわかる釣り人もいると聞く。なんとも釣り人を飽きさせないのはそんなところにあるのかもしれない。

宮崎県椎葉村。深い山々に囲まれた小さな集落で育ったボクは、家の前を流れる川が一番の遊び場であった。小学校の頃は釣りクラブ（教育の一環だったのか、放課後の時間だったのかは不明）まであり、その時間がとても待ち遠しかったのを覚えている。授業中に窓から入ってくる風の匂いや暖かさで釣りの季節が来るのを感じるとは、ど釣りが好きで、一つ上の姉と家のすぐ下でよく釣り糸をたらしていた。

夏になるとカナツキ（モリ）を片手に素潜りで、ヤマメやアユを追いかけて回したことで、魚の付き場を見て激流の中にもいることを学んだ。水面の波立ちをみて水中の岩などを想像して魚をイメージするのだが、本当に絶妙な流れの中に付いている。時には大型のヤマメの美しさに見とれて逃げられたこともある。獲ったヤマメはワタ（内臓）をとり持ち帰る。自然とナイフの使い方を覚え、時に内容物を確認した。川虫の他、バッタやカメムシ、カンタロウなどなど食性は旺盛で、時には石が出てくることもある。石と言うと大げさだが、小さな砂利を食べているのだ。増水後に多いのだが、雨が降り、水が増える前に流されないよう重しとして食べるとも言われている。気圧の変化を感じとるのか、空模様で判断しているのかなどは分からないが、凄いとしか言いようがない。さて持ち帰ったヤマメはセゴシ（骨ごとブツ切りにすること）にし、歯ごたえのある身は頭から尻尾まで美味しく頂いた。なんとも香ばしい香りに柔らかく白い身を頂ける塩焼きは数が釣れたときか、大きいヤマメの時に食べられる。フライにしても絶品で、とても美味しい魚でもある。秋には産卵風景を見られることもある。まさに映像で見る光景なのだが、何度も何度も体をはるがえし尾ひれを使いゆっくりと産卵床を作っている。そして産卵。と、ここで雄と雌の二尾だけでなく、追い回されていた少し小さな雄もどこからともなく入ってくる。釣り人からすると、大きい個体のヤマメの遺伝子だけのほうがいいと思うが、自然で生き抜くということの厳しさを知ることができた。

春・夏・秋とヤマメと近い環境で育った今は、ルーアフィッシングで尺を悠々と超える大ヤマメと出会うことが一番の願いだ。流線型の魚形に幅のある体。透き通るような肌。朱や橙が混じり、パーマークと呼ばれる斑紋が浮き出ている。曲がりがかった鼻先で清閑な顔つきの雄ヤマ



メと出会うのがボクの理想である。釣り人によって追求めるものは違うだろう。あくまでも理想であり、そう簡単に出会えるものではないことは分かっている。大ヤマメになるのは簡単なことではないだろうし、閉鎖された森の中では奇跡に近いと思える。もちろん海に降りたヤマメや湖で育つものは大型になりやすいが、どうしても体全体が銀色に覆われてしまつて、いわゆるサクラマスになると思われる。しかし想像もつかない奥深い渓谷にパーマークを纏った大型がいることがあるのだ。釣り人、鳥や獣、自然の脅威から賢く生き抜いてきた大ヤマメ。エサや育つ環境に左右されるだろうが、大きくなる個体はそうなるための遺伝子があるのだと思っている。小さいヤマメは大型になるのかそうではないのか、判断は難しいが、尺を超えるヤマメは翌年にはひと回り大きくなつて出会えるかもしれないし、次の世代で出会うことができるかもしれない。そう願いつつ、リリースする。自然との関わり方はとても難しいが、大切にしたい気持ちが一番だと思っている。大ヤマメばかりに目が行きがちだが、溪流の宝石と呼ぶにふさわしいのは小さなヤマメがあつていないのではないだろうか。ひととき目立つパーマークや色鮮やかでとても綺麗な体と、つぶらな瞳。手の中に輝くまさに宝石だと思える。

さあ。まだ見ぬ溪へ

理想のヤマメをもとめて出掛けよう。



文：椎葉茂雄

私の携帯電話のアドレス帳は五十音順なんて絶対出来ません。なぜなら故郷、椎葉村は椎葉さんばかり。だから親族、近所、友人、仕事先など、グループ検索で登録です。

ONE or TWO ?



ハッスルトラッドには全長の違う1フックの501、2フックの502の2モデルがあります。通称、50mmクラスということでゴーマルイチ、ゴーマルニと呼びます。1フックは数年前から試していたリア・シングルフックの最終型と言えます。フライマンの方もよく来る当店では「ルアーはトリプルでガチャガチャになるからね。」と言われるのが僕にとって耳の痛い話題でした。「ミノーでフライのように1フックで釣ることは出来ないか?」を考えた結果、後述のウエイト配置、フックの位置関係なのです。さらに、この下付きのフック位置は重心が下向きに働かせる効果があるだけでなく、キャスト時にリアをぶつけてアイが曲がり、本来のアクションが狂ってしまうトラブルも回避させています。2フックタイプは追尾してくるパターンでなく、垂直食い上げの渓魚を獲れることはもちろんですが、ウエイト配置をウッドのトラッド50mmを踏襲し、フロントウエイトを追加。アクション時に水深をより深く、1アクションから浮き上がりを押える前傾姿勢が取りやすくなっています。(前傾効果はウッドが大。)

鱒釣りはナイロンだと思う。

TROUT PLUGGING

渓流魚のプラグギンには適度な伸びのあるナイロンラインがやはり有効です。最新ラインよりもわずかに太いラインはシステムを組まなくても強い結束強度を実現。それは鱒釣りにおいて最新が最高ではない事実。300m巻きで50m毎にシール付き。だから取り過ぎがありません。



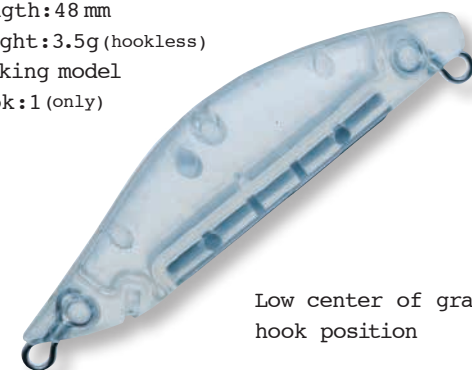
4LB / 0.165 mm
5LB / 0.185 mm
6LB / 0.205 mm
8LB / 0.235 mm
10LB / 0.250 mm



Shuttletrud CASKET INJECTION JET STREAM MINNOW

Internal structure

Type:501
Length:48 mm
Weight:3.5g(hookless)
Sinking model
Hook:1 (only)



Low center of gravity
hook position



Low center of gravity
out weight

Type:502
Length:50 mm
Weight:4.0g(hookless)
Sinking model
Hook:1 or 2

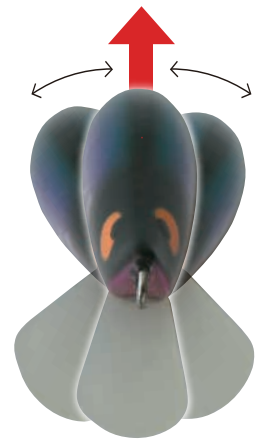


Insert thin circuit
board rip

ハッスルトラッドはウッドやバルサのトラッドミノーで培ったアクションを、インジェクションで再現、そして新たな挑戦を試みたミノーだ。いくつもルアーを使ってきた諸氏にはご存知の通り、一つのミノーですべてのアクションを兼ね備える事は無理だ。ウッドにはウッドの、バルサにはバルサ、インジェクションにはその素材由来と構造ならではの

特徴をふまえる必要がある。形状とウエイトを注意深く決め、リップを少しずつ削り、デザイナーである手島が狙っているアクションと、してほしい仕事をきっちりとこなす。そしてハッスルトラッドはこれまでのどのインジェクションミノーにもない独創的なアクションとなって、我々は新たな武器を手にしたわけだ。

3 BOTTOM WEIGHT



一般的なインジェクションルアーのウエイトは内部に組み込むものです。作業的にその方が圧倒的に作り易い。しかしそれをあえて、下部にむき出しの状態で内蔵する構造にしています。最終的にはコーティングされて見えなくなるのですが、これ以上ない、ギリギリの最下部にウエイトが仕込んであります。これはミノー内部の上下関係を浮きようにはっきりとさせ、左右ぶれの戻りのピッチを少しでもあげるための構造です。結果、シンキングなのにキビキビとしたアクションが実現されています。さらに軽量ミノーでは不可欠なベリーフックのバランス効果が期待できないリアのみのシングルフック構造でありながらこのウエイトシステムの効果で早く引いても回転する事はありません。

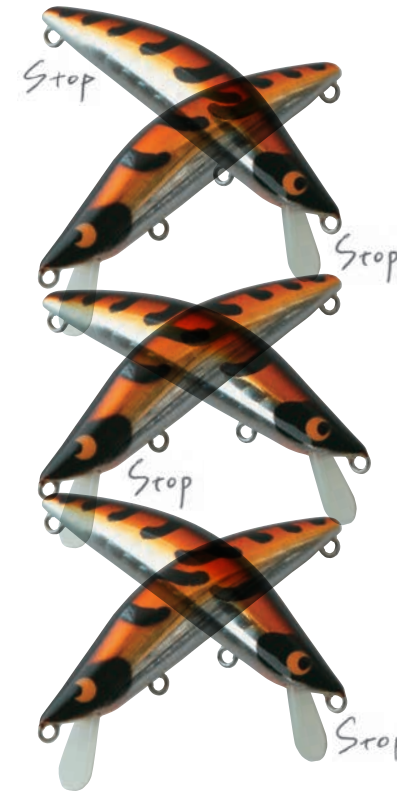
Non stress plugging

Line Tube

このチューブを取り付ければ、ここぞと言うところでミスを犯しません。渓流のミノーイングでアップに投げ入れてミノーやスプーンのフックがラインに絡むトラブルをかなりの確率で回避できるようになります。



2 STOPPING POWER



一般的なインジェクションミノーではリップは一体成形されているのですが、ハッスルトラッドはあえて差し込みタイプを選択。職人泣かせな工程ですが、実はこの案は職人の方から出ました。それは一体成形の分厚いリップではなく、薄いリップで水の抵抗を受けることでストップの効いたトゥイッチアクションが可能となるからです。微妙な違いですが、追尾速度に合わせて仕掛けることを追求すると、この止まれるトゥイッチの差は微妙ではありません。ミスなく魚が喰え、また弾き方次第で、魚を見てタイミングを合わせた喰わせが出来ることが非常に重要かつ有効なのです。このトゥイッチは軽くラインスラックを叩くだけで動かします。流れに合わせ、適正な間隔、強さでスラックラインを弾くと、従来品よりも水中で多回数にアピールできます。またウォブリングにロールが必ず加わるのでミノー位置が認識しやすく、次のコース取りを瞬時に考えられるのも特徴です。伴って、カスケードが拘るスイッチアクションのただ巻きではやや大きめのウォブ+ロールでかなりの低速でもアクションが可能となっています。



TRAD *minnows*

色褪せない伝統とは
微細な進化をやめないこと。



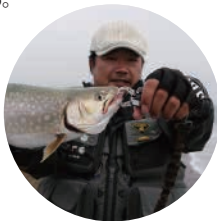
北海道在住の片岡鉄也氏はあらゆるルアーを駆使して目の前にいるイトウやアメマスに口を使わせる。モンスタープロデューサーやトラッドミノー90mmは彼のお気に入り。

NV98 (STYRENE)

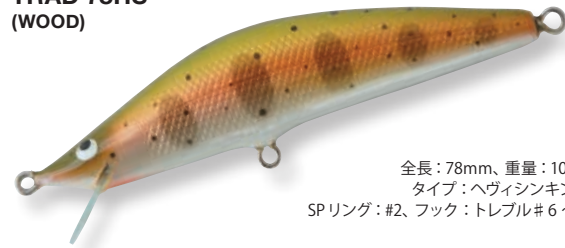


全長：98mm、重量：24.0g(フックなし)、タイプ：シンキング、
SPリング：#3、フック：トレブル#4～6

北海道で毎年、自分で釣り上げた海サクラやシロザケ、カラフトマス専用の冷凍庫にぎっしりと蓄えて冬を過ごす男がいる。中島茂俊氏である。彼の獲物は年間に100本を超えることも少なくない。そんな彼が冬にせつせと自分用に作ったジグがあった。よく釣れることは投稿からも知っていたが、実際に手島も遠征中に使用して、既存のジグよりも遥かにゆっくりとリーリングでき、足下まで追尾する海アメや海サクラを次々とヒットに持ち込むことに驚いたのだ。そして中島氏のご好意により、このジグをカスケットで商品化したのがヌーベルヴァーグである。ヌーベルヴァーグとはフランス映画革命の「新しい波」という意味。写真のカラーは氏が考案したアメマスカラーで「ナカジマイワナ」と命名。本来は波に合わせて3機種存在する中島ジグシリーズ。もちろん今後もラインナップを増やす予定だ。



TRAD 78HS (WOOD)



全長：78mm、重量：10.0g
タイプ：ヘヴィシンキング
SPリング：#2、フック：トレブル#6～8

TRAD 78F (BALSA)



全長：78mm、重量：5.0g
タイプ：フローティング
SPリング：#2、フック：トレブル#6～8

本流ヤマメ、サツキマスに使い易い78mmはフローティングとヘヴィシンキングの二種類で攻めます。フローティングながら飛距離の出る78F、深場ではヘヴィシンキングが重さで侵入します。78Fは初期型バルサが復活、ヘヴィシンキングはウッド製となります。(2017年リニューアル予定)



TRAD 90F (WOOD)



全長：90mm、重量：7.4g(フックなし)
タイプ：スローフローティング
SPリング：#3、フック：トレブル#5～6

TRAD 90F (BALSA)



全長：90mm、重量：約8.0g
タイプ：フローティング
推奨フック：トレブルフック#4～6

湿原のアップクロスで狙うイトウ用に開発された90mmは本流サクラマス狙いのダウンでもキビキビとしたアクションを見せます。トウイチチには機敏な横向きダート、流れに任せたドリフトでは絶妙にブルブルとローリングを繰り返して鱈を誘います。2015年に初期型のバルサ製が復活しました。



トラッドミノーの原型はイトウ釣りに行くと言い出した手島のために猪谷氏が20年前に作ったミノーだ。理想を求めて作った90mmTRADの外見は今とあまり変わっていない。フックに付いているのは初めて釣った78cmのイトウの鱗である。



ウッド ミノウ

木片小魚で釣りたいくて。

CASKET ORIGINAL DESIGN & BESPOKE MINNOW & LURE



鱈や溪魚の釣りはルアーやフライ、エサと様々な釣り方がありながら、古風や伝統、拘りを特に守っている釣りのように思う。ルアーを扱う我々が目指す最たる鱈の釣り方は木製の小魚型疑似餌(ミノー)なのだ。木製であるという雰囲気はもちろんだが、インジェクションと違い「中身が詰まっている」要素が最近重要なことが分かってきた。繊細な鱈や溪魚は視覚だけでない感覚で疑似餌を襲っているのだ。しかし木製のミノーは簡単には出来上がらない複雑な工程を必要とする疑似餌である。削り込んだ形状や透き通るような塗装、そして目を入れ、流れの中でキビキビと思うように動き出すと、まるで自分の分身が泳いでいるような操作感に陥る。そして川の中で閃光が走り、見事な鱈が釣り上げられ、思い出のコレクションとして木製のミノーはこの上ないアイテムとなる。

TRAD *minnows*

色褪せない伝統とは
微細な進化をやめないこと。



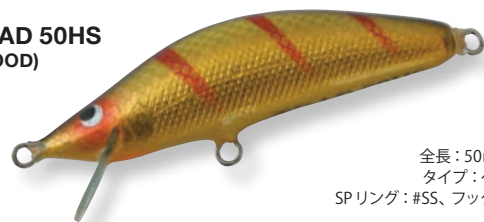
TRAD45S
(BALSA)



全長：45mm、重量：2.5g
タイプ：シンキング
SPリング：#SS、フック：トレブル#12

小さな釜が連続する源流用に開発。オフセットリップながら潜航深度は深くありません。これはアップでも即座に水流を受けやすいようにセットされています。

TRAD 50HS
(WOOD)



全長：50mm、重量：4.6g
タイプ：ヘヴィシンキング
SPリング：#SS、フック：トレブル#12

TRAD 50S
(WOOD)



全長：50mm、重量：3.5g
タイプ：シンキング
SPリング：#SS、フック：トレブル#12

前傾フォールで動き出し時の水深を得やすいシンキングミノー。スイッチアクションの喰わせのただ巻きにも拘ったミノーです。あらゆる溪流、中流域で使いやすいスタンダードミノー。増水時やさらに深い淵を狙う場合はヘヴィシンキングの間の長いトウィッチが効果的です。

TRAD60HS
(WOOD)



全長：60mm、重量：6.6g
タイプ：ヘヴィシンキング
SPリング：#2、フック：トレブル#10

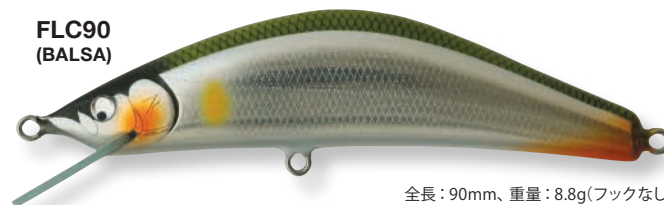
小粒なのにハイアピールなトウィッチダンスを決める60mm、ヘヴィシンキング。コンパクトながら飛距離や潜り方は78mmにも迫ります。本流ヤマメ、サツキマスはもちろん、小型ベイトを好むレインボーやアメマス、さらには春先のイトウの極小ベイト対策にも有効です。



Falcon

CLEARWOOD & CASKET

FLC90
(BALSA)



全長：90mm、重量：8.8g(フックなし)
タイプ：スローフローティング
SPリング：#3、フック：トレブル#4～6

2017年、春にテスト的に販売されたファルコン90mmミノー、本カタログのサクラマスコラムで紹介された狙い方に特化したミノーである。2018年の本格発売を企画中。



WOOD'N & BALSA

CASKET ORIGINAL DESIGN & BESPOKE MINNOW & LURE



FLC63DS
(BALSA)



全長：63mm、重量：5.2g(フックなし)
タイプ：シンキング
SPリング：#SS、フック：トレブル#10～12

FLC53DS
(BALSA)



全長：53mm、重量：4.6g(フックなし)
タイプ：シンキング
SPリング：#SS、フック：トレブル#12

FLC50S
(BALSA)



YAMAME

PUGGING TROUT

NIKKOU IWANA

GREEN AMAGO

全長：50mm、重量：3.0g(フックなし)
タイプ：シンキング
SPリング：#SS、フック：トレブル#12

Falcon

CLEARWOOD & CASKET



福島県でシャッドタイプに拘ってハンドメイドミノーを作ってきたクリアウッドの野木健仁氏の協力により、カスケットでは初となる生命感のある樹脂製のリアルアイを装着したハンドメイドミノーが2016年に誕生した。セルローズ仕上げのファルコンは非常に強固で透明感に溢れている。動きはキレがよく機敏でロッドワークに即座に答えるミノーの反射光から高速の鳥、ファルコンと命名。バルサ製でリップの形状には野木氏が培ってきたオフセットリップを採用しながら、動きの質によっては通常の差し込みリップの製作も行う予定だ。実験的な少量生産も企画され、カスケット愛好家にはまた新たな選択肢が増える。

上段ロゴ横のモノクロームヤマメは毎回発売する時に企画されるプレゼントカラー。

MINNOW PLUGING ASSIST HOOK



トラウトミノーのために開発したアシストフック。耳付きフックの早掛けは多くの方が知るところとなりました。絡みを防止するようアシストラインは短くセッティング。フック向きは作りにくい縦アイ仕様で掛け調子の針がセットされています。ダブル掛けのループノットフックは現場でリングブライヤーなどがなくてもセットが可能で、とにかく掛けたらばれにくい。



REELING & FLOAT ACTION

【リーリング&フロート】

MPは初めて扱う方でも簡単に狙いの動きを出しやすく作っています。

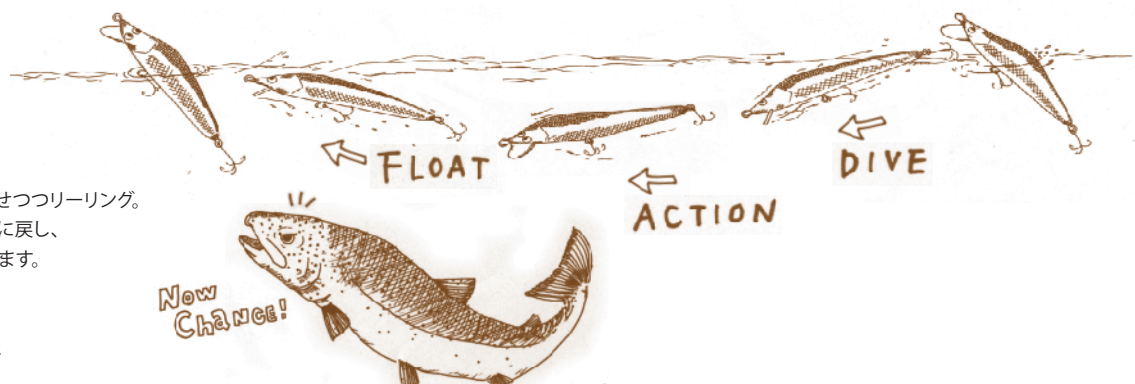
(1) ティップにラインテンションを保たせつつリーリング。

(2) リーリング停止後にティップを前方に戻し、ラインスラックを使ってMPを浮上させます。

(この瞬間にバイトが多い。)

(1) (2) を組み合わせて繰り返します。

自分の足下のカケアガリまでキッチリとアクションさせてください。



TADAMAKI ACTION



EVERY FISH BITES ON FOOT.

【ただ巻き】

ただ巻き、侮るなかれ。この基本操作が最もトラウトを刺激するようにセッティング。ただ巻きの速度は流速や抵抗を感じながらしっかりとプラグが動く速度を心掛けてください。MP145は潜航深度は浅く、スローに動かした方が効果的です。水面にうねうねと波紋が残る感じです。メインフィールドは緩やかな流れや湖、サーフなどを想定しており、早巻きには対応していません。MP90は早い流れの瀬の中でも動き、水深を確保するように設計されています。早瀬のクロスも泳ぎ切り、一定の場所のでステイロリープも効果的です。潜航深度は約50cm。そう、いつも来るのは足元です。

NEXT 4%

MONSTER PRODUCER

VERTICAL FLOATING TROUT MINNOW



小山俊之さんよりいただいたヒットシーンのアクション動画をご覧ください。

<https://vimeo.com/156231300>



我々たちはまた画期的なミノーを生み出した。それは垂直浮きのトラウトミノー。これは新たな分野だと思う。このミノーが生まれた背景にはまず手島がトラウトオフに楽しむ玄界灘のヒラマサブラッキングがある。ジャーク&ダイブさせるプラグに激しく、猛然と襲いかかるヒラマサは身体にも脳裏にも強烈で衝撃の釣り体験だ。手島はよくカーペンター社のプラグを使うが、水面に割って出てくるヒラマサのサイズがジグで釣るよりも大型であることを不思議に思っていた。何故老練に生き抜いてきた大型のヒラマサが水面のプラグに掛かってしまうのか？はつきりとした理由は分かっていない。そして手島の脳裏にはイトウやブラウンが水面のベイトを、派手に水柱を上げて捕食する様子をいつも思い出している。この釣り方をトラウトに応用できないかを考えていたのだ。さだかではないが、ルアー（疑似餌）に喰いつく魚は全体の3%だという。つまり97%の魚は見破るというのだ。大型魚が喰いついてしまうルアーとはこの3%の枠を超えるものであり、我々のルアー作りとは次の4%を超えることを目標とする。大型トラウトを水面（サーフェス）で狙うにあたってモンスタープロデューサー（以下MP）に盛り込んだのは派手なローリングアクションと垂直浮上、この二点だった。特にイトウは波打ち際のミノーのドリフトで喰いつかせた経験があったので、引き波を利用して最後までキビキビと動いて欲しい。ド派手なローリングは水底にいるイトウを水面まで誘うアクションとなる。そして任意タイミングでの垂直浮上、これがバイトの誘発に繋がる。そしてMPの試作を携えて挑んだ北海道のイトウ釣り。イトウは水面で喰ってくるだろうか？の心配をよそに期間中、90cmを筆頭に6本の大型イトウが応えたのだ。大型のイトウと言えば大きくなるのに年月を要し、何度もルアーを見てきたはずだ。本来、春のベイトは小型のシラウオやサケ稚魚、トンギョなどのはずが垂直浮きの大型ミノーであるMPに喰らいつく。大胆にも水面を割って出るのは大型のヒラマサ、老練なイトウ……。なにかが見えてきた。MPでの罫釣り研究はこれからなのだ。

木イチゴ

Kiichigo

なかなかまとまった量が採れないことが多いのでそのまま口にポイ。個人的に黄色のがおいしい、細かい虫は気にしない。お口にポイ。



ミズブギ

Mizubuki



さっとひと煮でうすあげと一気蒸しに火かけ煮に。みょうが、しょうがと合わせて中華風漬物にしてもうまし。

葉は「その場」で落としていく。根ごと引き抜かないように必ず「ナイフで cut」



わさび

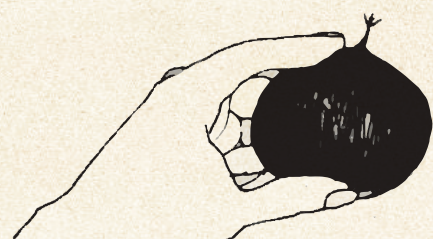
Wasabi



おりん+しょうゆ漬ける 葉わさび 重宝します

葉山葵たっぷり明太パスタ

明太パスタにイクラ。葉山葵の醤油漬をたっぷりのせて頂く和風パスタ。肉、魚、野菜と何にでも合う葉山葵は何かと重宝する。



大栗

Ooguri

落ちた瞬間 ドスン ヒュウ。大きは、大きな栗。渋皮煮や栗おこわに。



待ちかまえる

風よ、吹け



おはさんご存知

タラノメ

Taranome

一番芽のみ頂く

山菜づくしの冷やし天ぷらうどん

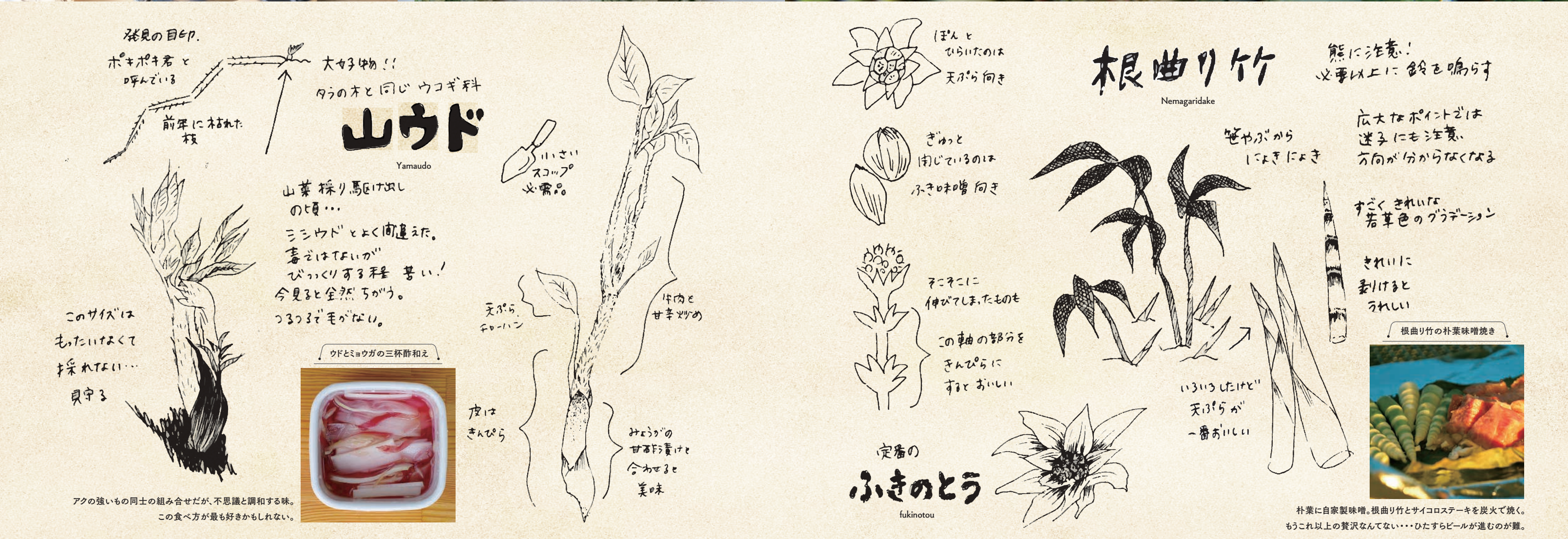


採れたて揚げたて熱々の天ぷらを冷たいうどんの上に。大根おろしとアサツキを添えて。



イワナより山菜。

イラスト・文：Whozzy 嫁 / 写真：Whozzy
旦那 (Whozzy) の溪流釣りに付いていへんに、すっかり山菜採り、いや草を食べることに夢中になってしまっ。春は花より団子ならぬ、お茶よりビール、イワナより山菜な Whozzy 嫁がどっぷりハマった山菜の魅力について語りませう。

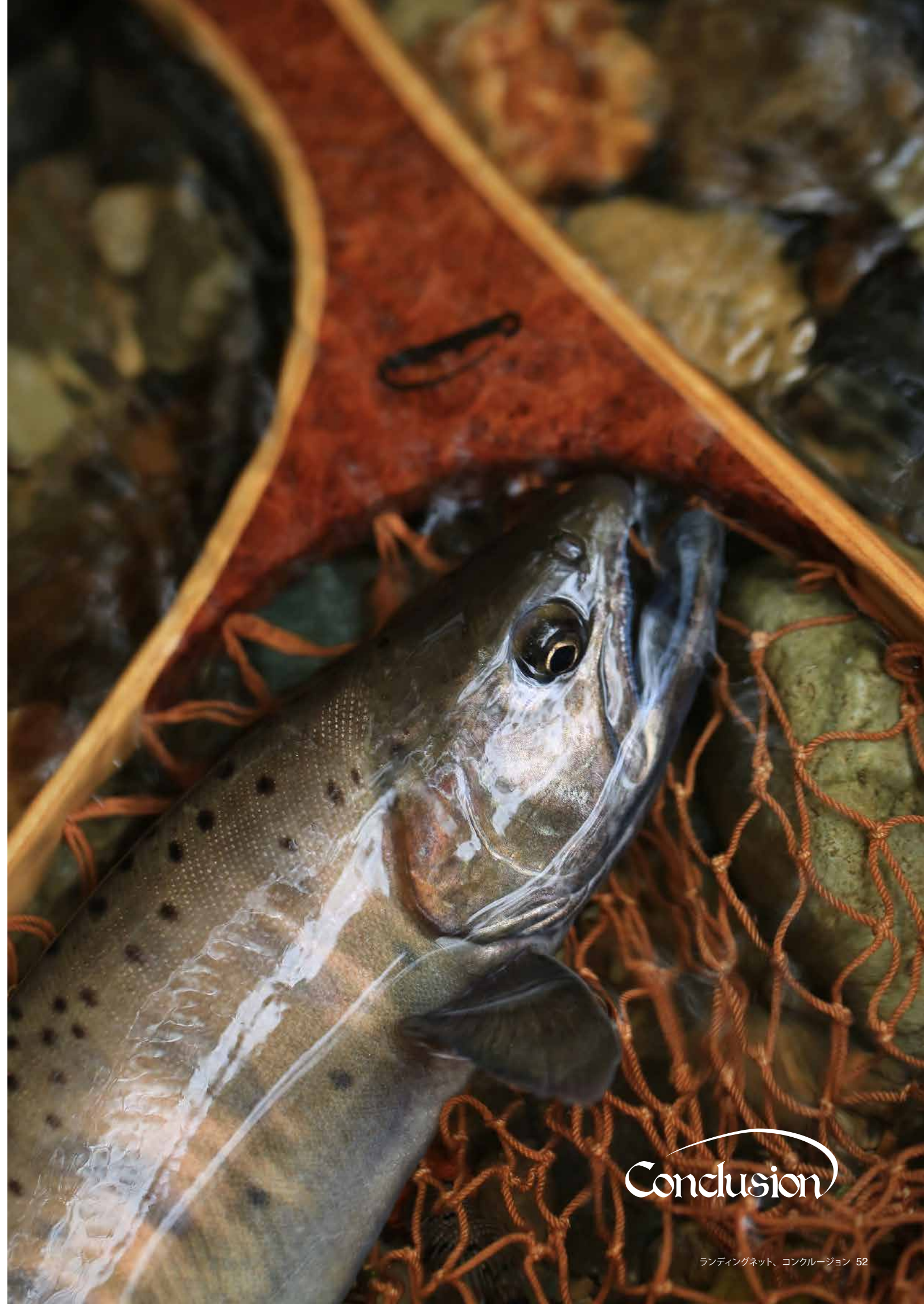




コンクルージョンは決着という勇ましい名前のネットだが、扱いやすく、軽い。そして形状は部屋の壁にあっても美しく佇むことを心がけてきた。表面の防水処理はウレタン仕上げではなく、オイル仕上げなのはメンテナンス性はもちろん、ネット自身を熟成させる楽しみを我々に与えてくれる。たとえ傷が入ったとしても、傷の深さに合わせてサンドペーパーで段差がなくなるまでゆっくりと削り、最後は高い番手のペーパーで滑らかになるまで磨く。そして専用のオイルを薄く、極力薄く、何回にも分けて塗っては乾かす。そうすれば新品の、否それにも勝る深みが出て、これまでに拘ってきた鱒の歴史を感じる、あなただけのランディングネットが自室の壁にかかることになる。



コンクルージョン、そしてロッドのリールシートにも使われる希少性の高い銘木は枯渇の一途をたどっている。しかし我々の飽くなき探究心と美しい渓魚に劣らぬ道具作りの情熱は一度も冷めることはなく、日々進化を遂げている。IMPRESS WOODは「情熱と加圧」の造語であるが、樹脂含浸を真空状態で行い、加圧染色を施して新たに命を吹き込まれた銘木である。それらはブラックマイカやターコイズなど長い年月をかけて輝きを放つ宝石に通じる岩石の名を冠して鱒釣りの道具として昇華される。



Conclusion

Conclusion

決着という名のネット



Big Trout

全長 [グリップ込み] / 60cm

ネット部 [縦 40/ 横 30cm]

参考・鱒族対象サイズ 40 ～ 60cm

ビッグトラウトには 40 ～ 60cm の魚を獲るための必要最低の要素が詰まっています。2014 年に遊びを利かせたカーブタイプにリニューアル。ランディングしにくくなるデメリットも入念にデザインした美しいリ・カーブデザインで克服。最初期のストレートタイプは職人と銘木ネットをスタートさせた贅沢なグリップの記念すべき一本でした。(ストレートは限定生産)



Sakura curve

全長 [グリップ込み] / 64cm

ネット部 [縦 45/ 横 33cm] / ネット深さ 67cm

参考・鱒族対象サイズ 50 ～ 70cm

モンスターサイズでは持ち運びに大きすぎるが 70cm に近い大型のサクラマスランディングするにはビッグトラウトのサイズはヒヤヒヤだ。そんな声を受けて 2013 年からラインナップに追加。意匠の趣向からカーブタイプですが、直線となる部分のほぼ延長にネット頂点が来るように設計されたリカーブ形状。カーブネットでも扱いやすいのは実証済みです。



Monster

全長 [グリップ込み] / 78cm

ネット部 [縦 52/ 横 39cm] ネット深さ / 85cm

参考・鱒族対象サイズ 60 ～ 100cm

イトウ、大型サクラマスなどのモンスタートラウトを照準とした大型ネットです。完成されたティアドロップ型のビッグトラウトを継承し、グリップ長を長めにそして強度も増すよう設計されたモデルです。大型ながらオイルフィニッシュ仕上げで驚くほど軽量で堅牢です。イトウ、サクラマス、ブラウントラウト、アメマスのどんな大物が来ても慌てることはありません。



Stream 23

全長 [グリップ込み] / 32cm

ネット部 [縦 23/ 横 18cm]

参考・鱒族対象サイズ ～ 30cm

険しい源流に Stream26 のダウンサイズが熱望されました。装備を少しでも軽くコンパクトに収めたい方にはお奨めです。実は模様の美しさをもっとも魅せてくれるのは幼魚班(パーマーク)の濃い 23cm くらいなのかも知れません。小さくても美しい形状のコンクルージョンは可憐なヤマメを美しくフレーミングし、まあまあのサイズは欲張りに写真に収めることが出来そうです。



Stream 26

全長 [グリップ込み] / 39cm

ネット部 [縦 26/ 横 24cm]

参考・鱒族対象サイズ ～ 40cm

渓流域スタンダードとも言えるカーブタイプ。念願の尺ヤマメのランディングはもちろん、美しい渓魚を獲る(撮る)ためのフレームと言えます。尺というサイズは渓魚の一つの壁ですが 9 寸くらいを超えると迫力が増します。こうした魚にも敬意を込め、ネットの内寸縦の全長は 26cm に設定。渓流で出逢うちょっと良いサイズも美しく演出することが出来ます。



Stream 30

全長 [グリップ込み] / 45cm

ネット部 [縦 30/ 横 25cm]

参考・鱒族対象サイズ ～ 50cm

ダム湖の陸封サクラマスや中流域の本流ヤマメ、サツキマスを対象(30 ～ 50cm)にした非常に軽量で頼もしく美しいカーブネットです。渓流用の小型ネットでは心許ない大物狙いのアングラーにオススメです。カーブタイプですが予断を許さない本気のランディングを考慮にグリップのカーブは Stream26 や 23 よりもゆるやかなリカーブ・デザインに仕上がっています。



湖底は未知の領域だった。

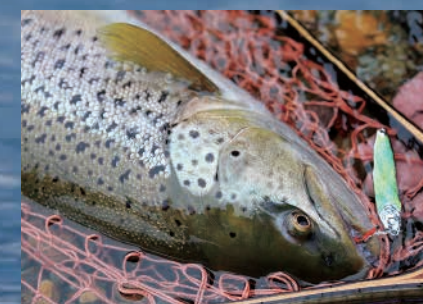
深淵の夜明け、

レイクショアジギング「ジャックガウディ」

DEEP WATER LAKE SHORE JIGGING

The BORN IN KYUSHU
Basket Original 
JACK GAUDI

これまでもスプーンのカウントダウンや重めのジグミノーで深い場所を探る釣りはあったが、効率的にボトムから中層を何度も、そして長時間攻めるレイクショアジギングという発想はカスケットのジャックガウディがもたらした。九州の奥深く、椎葉湖でこの釣り方は発見され、研究と試行錯誤の末、最適な重さは16～17g、そして軽比重の亜鉛製造塊のジャックガウディが誕生した。以来、全国の様々な湖で試され、レイクショアジギングの研究が進み、大型鱒をはじめ多くの実績が上がった。湖底の深淵はまさに未知の領域だったのだ。





亜鉛鑄造による軽比重のメタルジグ。ジャックガウディ“は、スピーディなディープレンジの攻略かつスローな誘いを可能にした画期的なルアーです。

トラウトの棲む湖やダム湖は深いことが多くシャローに頻繁に現れる魚ではありません。レイクショアジギングとはこのような水深のあるフィールドでのボトム攻略であり、これまで狙われてこなかった深部の大型鱒に安定した釣果を生むことが可能となりました。

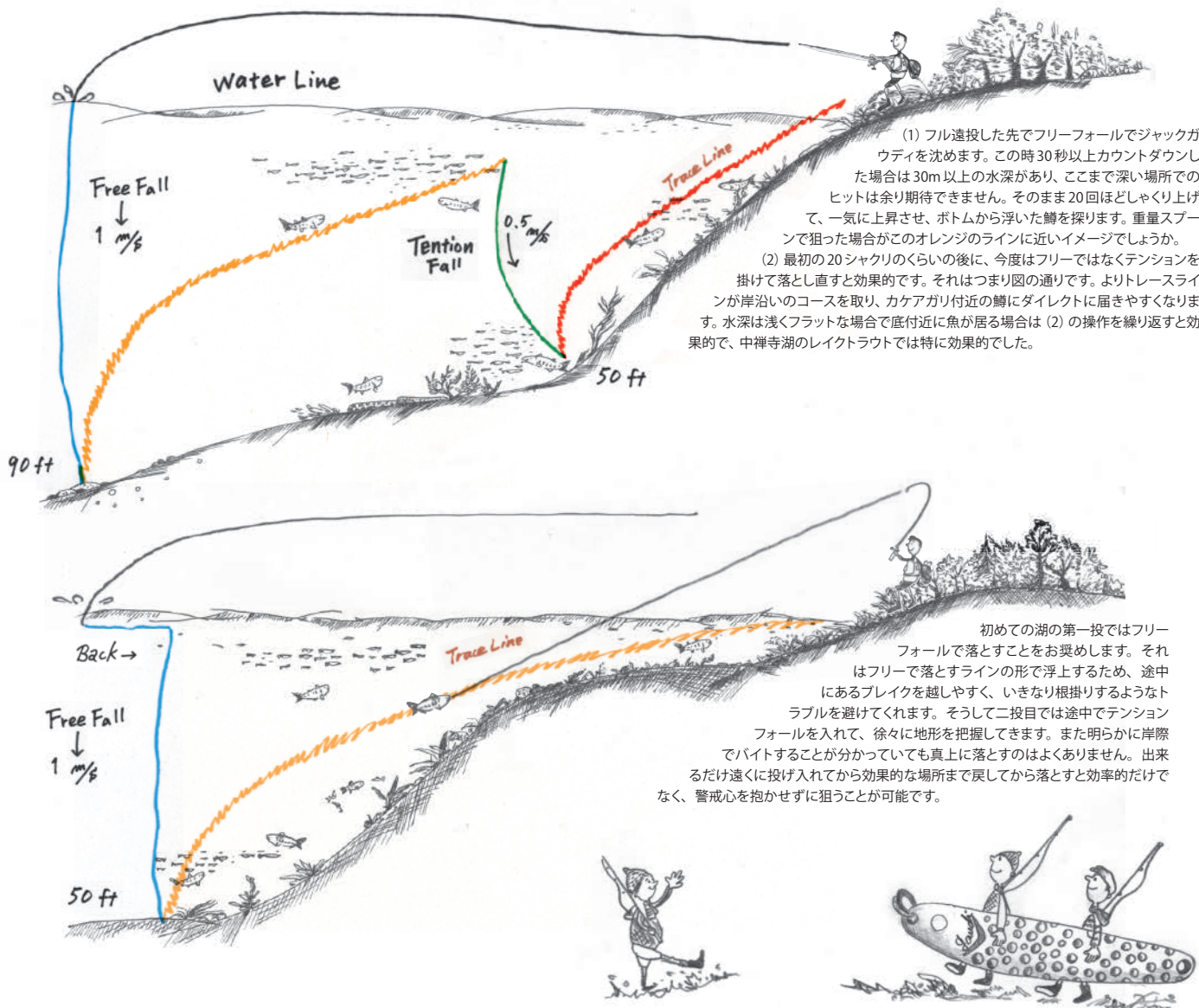
「ジャックガウディのボトム攻略と効率の追求」

これまで、湖はスプーニングによるボトム攻略が多く行われていました。仮にショアからのキャストイングで主流となる10〜18g程度のスプーンをカープフォールで使用した場合、スプーンの種類にもよりますが平均して沈下速度は約3秒／mである為、水深30mのボトムをとるには約90秒ほどかかる。その為、時間配分的には魚を誘う時間よりもボトムへ送り込む時間の方が長くなる状態です。それにリトリップで浮きやすく、意外と表層付近をトレースすることが多いように感じていました。対してジャックガウディはスプーンのように、エビになる心配が無いためリールのベールを返した状態でのフリーフォール

による釣りが可能に。ジャックガウディをフリーフォールさせた場合、沈下速度は約1秒／m、カープフォールさせた場合でも約2秒／mと、スプーンに比べて最大で3倍の速度でボトムに到達するので、フリーフォールでは水深30mのボトムをとる為に要する時間は約30秒と大幅な時間短縮が出来ます。またしゃくり始めてからは、スプーンのストップ＆ゴーよりもトウウィッチ＆ヒラヒラフォールで魚を誘う時間に多く費やせるメリットがあります。湖の釣りではどのタナ（水深）にターゲットがいるのかを強く意識します。それはイwana、ニジマス、ブラウン、サクラマス、サツキマスなどの複数の魚種が混生しているフィールドにおいても魚種別にヒットしやすいレンジがあることや、季節によってヒットしやすいタナがあります。それを素早くチェックするのは重要だと思ふのです。

「魚種ごとのタナ・ヒットレンジ」

まず魚種ごとのヒットレンジについて分かった事を挙げていきます。
イwanaとブラウンの居着きタイプは特にボトムを好む傾向にありました。（スモルト系の回遊タイプもあります）が、そしてそのような居着きタイプは群れではなく単発で居る場合が多い様に感じます。またワンドの中でも当たります。
続いてレインボーやサクラマス、サツキマスは湖の中をグルグルと動き回る回遊型が大半で、同じようなサイズで構成された数匹の小さな群れで行動している場合が多いです。ポイントも岬が中心でレンジもボトム〜表層と様々ですが、回遊しながら岸や水面に小魚を追いつめて補食しているようです。また、回遊して来た時にこのヒットしやすい（鱒が補食しやすい）レンジを知ることが出来れば連発の可能性も高まります。



(1) フル遠投した先でフリーフォールでジャックガウディを沈めます。この時30秒以上カウントダウンした場合は30m以上の水深があり、ここまで深い場所でのヒットは余り期待できません。そのまま20回ほどしゃくり上げて、一気に上昇させ、ボトムから浮いた鱒を探ります。重量スプーンで狙った場合がこのオレンジのラインに近いイメージでしょうか。
(2) 最初の20しゃくりのくらの後に、今度はフリーではなくテンションを掛けて落とし直すと効果的です。それはつまり図の通りです。よりトレースラインが岸沿いのコースを取り、カケアガリ付近の鱒にダイレクトに届きやすくなります。水深は浅くフラットな場合で底付近に魚が居る場合は(2)の操作を繰り返すと効果的で、中禅寺湖のレイクトラウトでは特に効果的でした。

初めての湖の第一投ではフリーフォールで落とすことをお奨めします。それはフリーで落とすラインの形で浮上するため、途中にあるブレイクを越しやすく、いきなり根掛りするようなトラブルを避けてくれます。そして二投目は途中でテンションフォールを入れて、徐々に地形を把握してきます。また明らかに岸際でバイトすることが分かっている真上に落とすのはよくありません。出来るだけ遠くに投げ入れてから効果的な場所まで戻してから落とすと効率のだけでなく、警戒心を抱かせずに狙うことが可能です。

「ジャックガウディのアクション方法」

伝えるのが難しいアクション操作ですが、大きく、大きくシャクると言うよりは、一日しゃくつても疲れない力加減で十分です。弱すぎるのもダメですが、ロッドでジグを引き過ぎるとフリブリと泳いでしまい、喰いやすいヒラヒラフォールの間が作れません。スラックをしつかり弾くイメージ。ここはソルトのジギングとは少し違いますね。僕の場合、ロッドを握る手の親指と人差し指だけでホールドし、あとの指はほとんど力を入れず添える程度の状態でしゃくつていきます。ロッドをしつかり握りしめてしまふと一日中しゃくることが難しくなるし、ジグが暴れすぎてヒットチャンスが減ってしまうと思います。

ジグにアクションを入力する際は、ジグに力加わる時間を極力短くすること。つまりバントと力を加えて、すぐさまラインを緩める動作を繰り返す。このとき竿先にクシャツとした糸フケが生まれていれば有効なアクションが生まれています。有効なアクションとは、ジグが水平姿勢の状態のままバラバラとフォールしていく状態をイメージしています。ジグが水平状態になる様に跳ねさせるには、前記のようなラインスラックを弾くトウウィッチするジグは、鱒に補食するタイミングを与え、水中で乱反射する事で集魚能力も高めます。

この集魚能力と補食のタイミングを生み出す事に非常に長けているのがジャックガウディ最大のメリット。湖では魚の目先にルアーを通す事が難しいため、遠くから魚にルアーの存在に気付かせるか否かが釣果を大きく左右するのは言うまでもありません。1しゃくりの度に補食のタイミングを与える事が出来る為スプーニングよりもヒットチャンスを得やすく、かつ狭い面と広い面があるこ

「地形把握がヒットの近道」

とで明滅を繰り返すので見破られにくい性質もあります。特に岸際までチェイスして来た魚に対してはスプーンに比べても圧倒的にヒットに持ち込める確率が高いのもメリットだと思います。

あなたの目の前のポイントはジャックガウディのカウントフォールで水深が分かれます。（イラストを参考にしてください）。また左右に振ったキャストを駆使しての地形把握は重要です。悔しいけれど根掛かりやヒットが連発することでも分かれます。また地形に合わせた狙い方も可能です。また比重のあるジグの着水音は喰いのある場所の真上では避けます。遠くに投げ入れて少し巻き戻してから落とすこともコツだと言えます。そうして地形の概要を沈下の秒数で分かってくれば、およそ一カ所でキャストする時間は30分〜2時間程度で、アタリがなければ移動。ポイントの接岸やモジリ、ハネもないのに一カ所で粘るよりは何か所か移動をした方が安定した釣果が望めます。もちろん一度入ったポイントに後から再度入る場合も多いです。

「鱒の補食は壁がキモ」

鱒が補食する際には、獲物の進行方向を制限できる場所、所、補食をしたがる傾向があります。ボトムから直後の

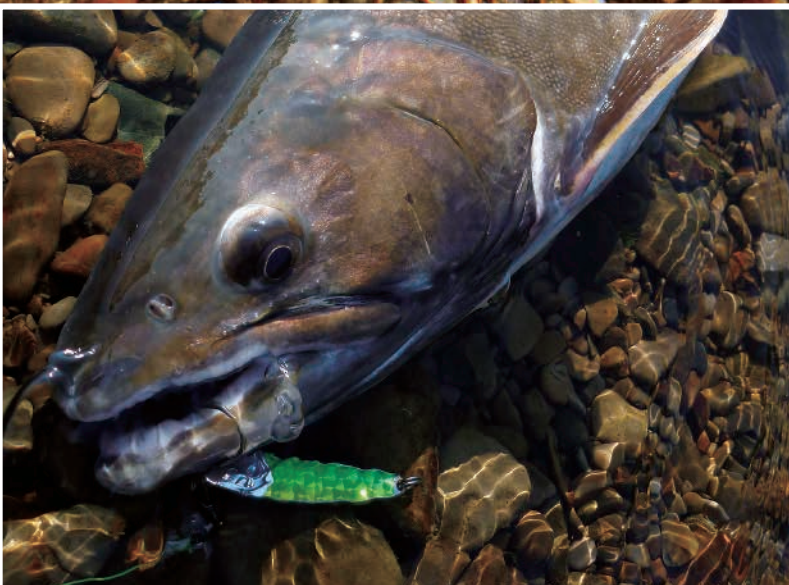




5月の中禅寺湖、レイクトラウトはジャックガウディに反応した。溪流の淵や深みの反転流を利用できるサイズダウンモデル、ジャックガウディ Jr も追加。

シャクリや足下ギリギリでヒットが多いのも、岸際まで追いつめる事で補食しやすくなる為だと考えています。地形にもよりますが、ジャックガウディをフリーフォールでボトムから20回しゃくった場合、平均して約5〜10m弱ボトムから離れています。ヒットする場合の多くがこの20回しゃくる間にヒットしていることから、ボトムから離れきったジグには追尾を止めている鱒が多いことが推測されます。またゴンツ、コッソ、モゾ、等の前当りがあつた場合や、しゃくっているジグが急に重くなったり、軽くなったりした場合は魚が追尾しているケースなので、止めずにしゃくり続けます。それでも食い切らない場合は再度ボトムを取り直しますが、この最中にもヒットが出やすい。しかしフォール中は針が上を向くためヒットは掛かりどころが悪い場合が多く、バラシも極端に多くなる為、ドラグ値を下げ、ファイトはより慎重に行うようにします。

ボトムを取り直す際はフォール中のアタリを取る為カーブフォールを使うことが多いです。これによりトレスラインを岸に近づけることも出来ます。そして逐一、ボトムを取り直すのに要する時間をカウントし、自分の操作するジグがボトムからどれだけ離れていたかを知ること重要です。ボトムの取り直しに要する時間から地形の変化も把握する事が出来るため、地形の凹みやブレイクライン等の地形の変化に気づくことができれば、そこを集中的に探ることが出来ます。スプーンより沈下速度の早いジャックガウディは、よりスピーディに地形情報を把握する事にも一躍買うわけです。なにより、人からは見えない部分ーディープレンジを手探りで探し当てて得た魚は『釣れた』のではなく『釣った』と胸を張って言えるのではないのでしょうか。そして『見えない』部分があるからこそ湖ならではの楽しみ方がたくさん詰まっているのだと思います。



BORON HANDLE & BEZEL GRIP

ブランクとグリップはいうならば、カメラのレンズとボディだ。

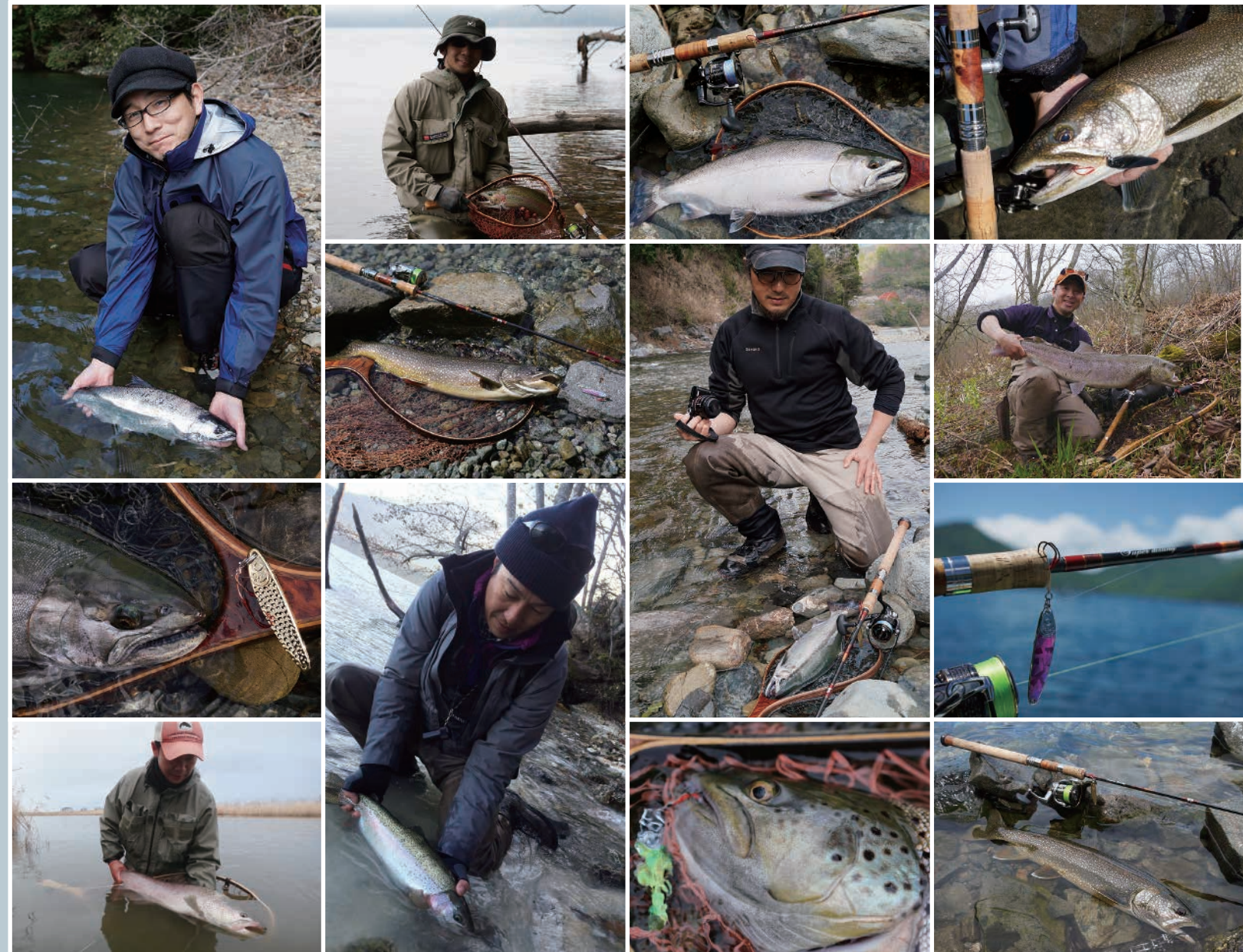


ブランク脱着にこだわる。

トラウトロッドのブランクはあらゆる釣りの中でも過酷だと思う。それは溪流という、まさに山あり谷あり、崖あり、流れありといった道なき道の中を何キロも移動する釣りであり、当然片手にロッドを持っていて、木や岩などにブランクを当てないでいくことは至難である。だからグリップよりも先にブランクがダメになる。我々が考案したグリップとブランクを切り離すという脱着交換式のコンセプトはブランクだけを交換できるメンテナンス性が優れている。それにつり人は飽きっぽい。今度のもっと張りのあるロッドを使ってみたい、コンパクトにして源流を目指したいなど釣り人の欲望の要求は幅広く、深い。カスケットはそんな要望にも応えていこうではないか。ひとつのグリップで複数のブランクが使える。それはまさにカメラのレンズとボディの関係に等しいのだ。拘りのグリップに、目的のターゲットに迫る最適なブランク。これ、まさにカスケット(レンズ)沼なり。

「魚種に応じたバラシにくいドラグ値」

多くの方にヒアリングをしてきて魚種別の差を感じることがあります。それはバラシを減らす推奨ドラグ値の設定です。ヒットしてからのバラシの多くは伸びの多いPEラインでのファイトによる口切れだと考えています。噛むようなバイトが多い鱒はジグを丸呑みすることは少なく、針が外掛かりするケースが多い。ですから魚種の口や顎の硬さが異なることと、ヒットしてからの暴れ方の違いが関係している様に思います。つまり、口の硬い(裂けにくい)イwanaやブラウン、イトウは、ドラグ値を上げていた方がセットフックもしやすくバラシが少ない。突進型というよりグイグイと暴れる性質でセットフックを重視した高めのドラグ値が良い様に感じています。対して、サクラマス、サツキマスは前述の魚種に対して口の軟らかい(裂けやすい)魚種であることに加え、反転してからのダッシュが速い。そして表層付近まで浮上してくると急に向きを変えるダッシュとローリングで抵抗します。そこで暴れないよう、いなすようなファイトを心がけます。その為ドラグ値はジャックガウディをしゃくつてギリギリラインが出ないくらいの低めの設定です。もちろんヒットする場所や対象魚の大きさに応じてフックサイズやドラグ値は変えてください。レイクシヨアジギングの釣りはまだまだ多くの未開な部分と可能性があります。全国にはディープエリアを攻略されていない、殆ど手付かずのフィールドもあると思います。そういったフィールドが思い当たる方、通える距離にある方こそジャックガウディを携えて行ってみる価値があると思います。神秘的な湖の中には、想像を越えた巨大な鱒が悠々と泳いでいる。深淵色に染まる水辺にはそんな夢があります。





Changeable grip system



- VERY SHORT MODEL (全長:195mm 参考重量:99g)
- SINGLE MODEL (全長:235mm 参考重量:128g)

【ブランクへの脱着方法】

ベゼルグリップは銘木とジュラルミンの金具から構成されます。ブランクの交換の仕方は以下の通りです。



ブランクにはベゼル専用のフェールが装着されていないと取り付けることが出来ません。(1) 付属のゴムのリングを嵌め、続いてウッドリングを押し上げます。続いて、もうひとつのリングを嵌め、動かないところまで押し上げてブランクセットの準備が完了です。(2) まずフロントキャップを時計回り逆方向に回して緩めます。



(3) フロントキャップの中にはジュラコンと呼ぶスリットの空いた樹脂製パーツが入っていることを確認してください。(4) ウッドリングが装着されたブランクをフロントキャップの穴の中に挿入します。フロントキャップを時計回り方向に回すとネジが締まり、ジュラコン内部に入った金属のフェール部分を押えます。(5) 最終的に固定する前に、リールシートとブランクのセンターをやや右位置に合わせます。最終的にあと数ミリで締め込む際にブランクが回ってしまいますので、少し見込み分をずらした上で締め込みます。この時、キャップは全閉状態にはなりません。1mm程度の余裕がある状態 (6) が正常です。仮にずれている場合は (5) の微調整を繰り返してください。



注意点

※締め込む際はくれぐれも工具などを使って締めないようにしてください。※どうしても緩んでしまう場合はフロントキャップのスクリュー内部に高粘度のグリスを適量塗布してください。または長年の使用でジュラコン内部が減っていることもあります。その際はジュラコンを新しいものに交換してください。

+BORON BEZEL GRIP

CHANGEABLE BLANKS SYSTEM GRIP

トラウトロッドの概念を変えた銘木グリップ

ベゼルグリップとは溪流用ブランクを脱着交換できる銘木とジュラルミンで出来た特別なグリップです。例えばブランクが折れたり破損したとしても、有限である銘木を未永く愛用できるよう考案されました。ひとつのグリップを持っていればあらゆるブランク(直径8mmまで)を溪流で使用することができます。ベゼルグリップの由来、ベゼルとは時計のガラス蓋を止める固定リングのことを言います。考案者である手島がグリップ、ブランクの脱着システムを考案する際、ずっとフロントの形状を悩み続けていましたが、ふと腕にはめていた時計からデザインの着想を得ました。そして時計の文字盤部分に銘木のウッドリングを嵌め込み、手島が拘るサムオングリップのリッツタイプの美しいフロントキャップデザインを得て完成したのです。さらに2016年より、ベゼルグリップの構造パイプの内部にもボロンをコンポジットしました。



ボロンの効用をどう捉えるか。 ボロンの音の伝達速度に注目。

今や30tを楽に超える高弾性カーボンがある時代にボロンの魅力、効果はなんだろう？我々は自問してきました。そのひとつの答えが独特の感度。ボロンは音の伝わる速さが16,200m/sとアルミニウムの約2.6倍以上であることから、音響材料としてはベリリウム以上に理想的な素材として知られている。これをハンドル部分に集中して使うことで微細な信号を増幅して手に伝えやすくする。これがニューコンセプト、TUNING FORK BORON である。チューニングフォークとは音叉のこと。あたかも音を共鳴させる効果とグリップインサートの形状を重ねたことがネーミングの由来である。



軽量で堅牢なジュラルミンの金具。トリプルロックリングはすべてを締め上げた後、僅かに上のリングを戻して締め上げると簡単にはずれない。



交換可能なローレット&銘木エンドは従来型のエンド金具とも互換性があります。もちろんラバーエンドも装着が可能です。

ハンドルとブランクスを別々に考える。



ハンドル脱着コンセプト

チューニングフォークボロンハンドルはハンドル脱着システムを採用。これによりブランクがさらに自由度を増して選べるようになった。交換方法は抜いて挿すだけのシンプルで簡単なものです。細かい好みでハンドルの長さ違いを所有して使い分けることや、海水用に樹脂製のリールシートを選ぶこともできる。また溪流で酷使するトラウト用の細いブランクはどうしても折れや破損は付きものでした。ハンドルが脱着になったことで貴重な銘木ハンドルをそのままに新たなロッドを買い増しすることが可能となりました。

ハンドルはカメラでいうボディ、ブランクスはレンズだ。



ひとつのハンドルで二つ以上のブランクスに対応

ボロンハンドルは一つのハンドルで最低2種類のブランクに対応出来るようにいたしました。ボロンハンドルは高弾性カーボンとボロンの素材で守られているので、ほぼ壊れることはありません。

※通常の使用において壊れることはほぼありませんが、ハンドル部分を踏んだり、重いものの下敷きになったり、強い加重がかかるときは破損することもあります。

さらなる進化



2016 年からデザインを一新。

コルクに集積コルクを加え、摩耗しやすい部分を補強。さらにエンドウッドをローレットリング&ウッドに変更し、さらに高級感を増して皆様にお届けします。ウッドはジュラルミンリングに固定されていません。つまり傷の着いたエンド金具だけを交換することが可能です。2016年度よりボロンハンドルの呼称を変更。上図のようにまとめました。大きく分けて、5ft、6ft、7ft、8-9ftの4つのタイプがあり、その中でもフロントコルクやリアコルク部分の長さ違いのA~Hと表記いたします。



ボロンが見える初のロッドシステム

BORON HANDLE

カスケットでは溪流用ロッドのベゼルグリップに続いて、本流用ロッドにまでブランクの脱着システムを採用しました。その名はボロンハンドル。2012年、我々は先駆けて、トラウトロッドにおけるボロンの使い方を見直しました。ボロンが夢の高強度素材と呼ばれたのは80年代。現在はロッドを構成するのにさらに最適で高弾性なカーボンが登場。ボロンは役目を終えたかのように思えましたが、我々はボロン特有の感度に注目。それはブランク内部にボロンをコンポジットするのではなく、ハンドル部分、特に脱着の差し込み部分およびリールシート部分に集中してボロンを封入するものです。結果、これまでのボロンロッドはボロンが入っていても表面に見ることは出来ませんでした。この時初めて、コンポジットさせたボロンを可視化するロッドが誕生しました。往年のボロンの高級イメージを損なわず、新たな価値を見出したカスケット独自の脱着式ハンドルの完成です。



Speyside



大河川、湖、サーフなどで沖までの大遠投、あるいは足場の悪い場所でレンジスが欲しい、ルアーウエイトも重いから、ある程度軽いものまで投げたい。そしてあなたが狙う鱈が70cmを超える大型魚ならばスペイサイドの出番です。しなやかなソフトティップは軽量ミノーのキャストイングも可能です。また、鱈の暴力的な反転もしっかり受け止め、身切れさせにくい追従性のあるミッドセクション。そして固まり切らない、ジワジワとしたトルクフルな反発力を発揮するハードバットを備えています。同様のラインナップの比較としてはバットパワー的にはトライアンフよりも上、バルキーバックと同等ソルティスベイサイドよりも下のパワークラスとなります。ただしそれぞれの操作感はまだで異なります。キャストイングは上記のテーパーデザインを理解して、どの部分を使って投げられるのかを考えれば以下の推奨ウエイトは無視して下さって結構です。レギュラーテーパーのスペイサイドは使い手によって奥深い引き出しが期待できます。



カスケットのレザーアイテムも製作頂くレザースタイル・ペルフェット代表の中塚亮氏。タスキバッグやブライヤーケース、魚類模型作家の吉田光氏とのコラボパッチなど今後のアイテムにも乞うご期待。



ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
SPB92XHS	9'2"	10-35g	8-16lb	145cm	8-9ft ボロンハンドル・タイプG (Hも可)	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P
SPB88HS	8'8"	7-28g	8-16lb	137cm	8-9ft ボロンハンドル・タイプG (Hも可)	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P

Triumph



トライアンフは本流のサクラマス、サツキマスロッドとして開発されました。ティップはスペイサイドよりも張りがあり、感度がよく、タイムラグのない操作に優位性があります。素で振った感じで硬いロッドだと思われるかもしれませんが、そうではありません。トライアンフラインナップのTRB83,77,72の3機種はブランクの元となるマンドレルの直径を上げて強度を出しつつ、高弾性カーボンを薄く巻くことで軽量感とキャストぶれの少なさ、ティップの適度な張り感を入念に設計されて作り上げました。それにより1クラス下のロッドを使うような軽快さを感じることが出来ます。そしてトライアンフを使う皆様を感じるのが、張りのある操作性なのに、魚が掛かってからは一気にフルベンドする柔軟なテーパーデザインです。暴れまくる大型鱈をロッド全体で受け止める性質があります。それは素で振ったときの硬さを思い違いするくらいです。重い流れの中で掛かった大鱈をジワジワと寄せる粘りのあるブランクはPEラインとの相性もよく、ベイトキャストイングにも向いているブランクと言えます。



ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
TRB83HS	8'3"	7-28g	8-16lb	130cm	8-9ft ボロンハンドル・タイプG (Hも可)	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P
TRB77HS	7'7"	7-24g	8-16lb	122cm	8-9ft ボロンハンドル・タイプG	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P
TRB72MHS	7'2"	5-20g	6-10lb	113cm	7ft 用ボロンハンドル・タイプE (Fも可)	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P

Salty Speyside



フラスコ金具にラバーエンドの古風なトラウトロッドをイメージして作られたソルティスベイサイド。海アメ、海サクラ、イトウをはじめとしたショアジギング＆ブラッキング専用で作られた豪腕なソルティ・キャストイングロッドです。1mを超える大型魚をサーフで強引にずり上げるようなランディングも出来るよう、バットにはかなりパワーを持たせています。よってシーバスや青物にも問題なく対応。もちろん海水での使用を考えられたパーツで構成されています。ブランクのデザインにおいてはスペイリバーを流れ出るスコットランドの港町や海辺にも似合うよう、少し古めかしいラバーエンドをグリップエンドに施した珍しいデザインです。実はこのラバーエンドは英国で作られているもので、イギリスに古くからあるハーディ社のオールドのフライロッドにも使用されているラバーエンドと同じもの（まったく同じに作られた復刻品）です。ですからネジのピッチは日本にはない特別なもので、カスケットのロッドエンド（ジュラルミンエンド、ラバーエンド）はすべてこのネジのピッチで作られ互換性があります。



ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
SSP97ZHS	9'7"	10-45g	8-20lb	152cm	コルク＋フラスコラバーエンド (ブランクスルー)	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P
SSP89XHS	8'9"	7-30g	8-16lb	138cm	コルク＋フラスコラバーエンド (ブランクスルー)	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P

Bulky back



「激流の中に巨大なサクラマスが潜む。」そんな話をしてくれた常山氏は二年連続で70cmを超えるサクラマスをトライアンフで上げる。しかしそのファイトにはいくつかの不安がありました。それは雪シロを含む本流の押しの強い流れでバットの限界近くまでトライアンフが曲がり込み、どうにもこうにもコントロール出来なくなる時間があることでした。現に足場の悪い所では魚を止められず、何度もバ Rash を経験。この問題を解決すべくバルキーバックはトライアンフのモアパワーバージョンとして開発がスタートされました。トライアンフの操作性をそのままに、ギリギリの場所では耐えるだけでなく、強引に鱈の頭をこちらに向ける。この命題のため、バルキーバックはトライアンフよりもバットを中心にパワーを10～15%上げた。そして分厚い背中をした巨大なサクラマスが瀬で掛かっても制御して上げられるようになる。それはまた、大型サクラマスだけでなく、北の大地の10kgを超えるイトウなども狙える最強の大鱈ロッドが完成していたのだ。



ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
BBB88XHS	8'8"	8-30g	8-16lb	137cm	8-9ft ボロンハンドル・タイプH (Gも可)	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P

Mark Spider

GENUINE TROUT BLANKS CASKET



溪流をベイトキャスティングリールで楽しむ方が増えました。これはカスケットでは初となるベイトフィネスのために設計を施したブランクです。マークスパイダーは細身のカーボンブランクでティップにパワーを持たせたスローテーパーデザインです。ゼロ負荷で投げるスピニングと違って、ベイトキャスティングは安定してスプールの回転させながら放つパワーが要ります。このキャスティングのパワー伝達をティップの先端に感じつつ、垂らしを短く、ロッドを後ろに静止してから振り抜いてもキャスト出来る絶妙な張りや曲がりを設定しました。そしてキャスト後のぶれも少なく、初速のパワーをよどみなくコントロール。このキャストで放たれる一直線のラインイメージは蜘蛛が最初の糸を鋭く吐き出すことを連想して「渓魚を狙う蜘蛛」こと「Mark Spider」と名付けました。マークはパーマークを意味するマダラ模様の意です。



ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
MSB55MT	5'5"	3-7g	4-6lb	85cm	5ft用ボロンハンドル・タイプB(Aも可) ※ベゼルグリップ対応可	スロー	印籠継ぎ・センターカット-2P

Alcedo Climber

PHOTOGRAPHIC STREAM KINGFISHER



本格的なバックロッドをお望みの方はアルセドクライマーを一度お手に取りください。危険も伴う源流部は、目的の谷までの往復路や、行く手を阻む滝を上ったり、高巻きする際、ロッドをバックバックに仕舞って両手をフリーにしたいものです。さらにカスケットではバックバックまで背負わず、軽快なベストスタイルの背面ポケットにも入るよう、分割を4ピースとした設計コンセプトを主眼に置きました。細くて多点継ぎのロッドは強度面から思い切った設計が出来ない事がデメリットですが、セクションごとに素材や巻き方を変え、姿の美しい印籠継ぎを採用。(ACB50LSは印籠継ぎ部分は1箇所) 道具にこだわり、釣り具よりカメラが重い、写真好きな方への自己満足も高めています。そして予備ロッドのイメージが強かったバックロッドの常識を覆し、メインロッドとしてもお勧めできるバックロッドが誕生。現在三種類あるアルセドクライマーは単純にパワーが違うだけではありません。それぞれに味付けが異なり、あらゆる源流スタイルにも対応できる完璧な布陣を敷きました。



ACB52MS-4(5ftボロンハンドルAtype用、Btypeもあり)



ACB52LS-4



ACB50LS-4

ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
ACB52MS-4	5'2"	2-9g	3-6lb	42cm	5ft用ボロンハンドル・タイプB(Aも可) ※ベゼルグリップ対応可	レギュラー	印籠継ぎ・4P
ACB52LS-4	5'2"	1-7g	3-6lb	42cm	5ft用ボロンハンドル・タイプB(Aも可) ※ベゼルグリップ対応可	スロー	印籠継ぎ・4P
ACB50LS-4	5'0"	1-5g	3-5lb	36cm	5ft用ボロンハンドル・タイプA(Bも可) ※ベゼルグリップ対応可	ファースト	並継ぎ+印籠継ぎ・4P

Revolution



レボリューションシリーズはすべて1&ハーフという特殊な継ぎ位置で構成されたロッドです。つまりティップ側1番にすべてのガイドが載り、1ピースに近い構造で構成されています。これは超繊細なソフトティップを搭載しつつ、ミッドからバットセクションには2〜3クラス上の大きなパワーを持たせるという相反の難しい要素を実現するためにセンター部分に継ぎを排除したのです。すべてのラインナップに共通する絶妙なエキストラファーステーパーはバックハンドなどの軽いキャスティングでミノーが低弾道に放出。また真骨頂であるソフトティップの下にあるフッキングのためのもう1本の隠れた竿が威力を発揮。ネズミ仕掛けのように反射的に魚が喰いついた瞬間からフッキングパワーを伝達します。ですから、ナイロンで遠くで掛けた魚も確実にフッキング。このロッドでフッキングミスは言い訳になりません。このバットパワーは渓魚には強すぎると思う諸氏も一度この「掛けたら獲る」レボリューションのテンションを体感すると後戻り出来ません。



ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
RB72MHS	7'2"	5-18g	6-10lb	132cm	7ft用ボロンハンドル・タイプE(Fも可)	ファースト	印籠継ぎ・1&Half-2P
RB62MS	6'2"	3-10g	4-8lb	116cm	6ft用ボロンハンドル・タイプD(Cも可)	ファースト	印籠継ぎ・1&Half-2P
RB55MS	5'5"	2-9g	3-6lb	111cm	5ft用ボロンハンドル・タイプB(Aも可) ※ベゼルグリップ対応可	ファースト	印籠継ぎ・1&Half-2P
RB48MLS	4'8"	2-7g	3-6lb	95cm	5ft用ボロンハンドル・タイプA(Bも可) ※ベゼルグリップ対応可	ファースト	印籠継ぎ・1&Half-2P

Super destiny



ジャックガウディから始まったレイクショアジギングという新たな分野。この釣りの面白さはとどまることを知りません。今まで狙えなかった深場の鱒をダイレクトに狙う。これまでの湖で深い場所を狙うにはヘビースプーンや重量のあるジグを遠投そしてジャークを繰り返していました。しかしカスケットが提唱するレイクショアジギングの釣りはこれとはまったく違う攻め方をします。それは16gの亜鉛製のジャックガウディを即座にボトムへ沈め、そこからカケアガリを中心にトウイッチにも似た独特のアクションでボトムから表層までじっくりと鱒をスプーンよりもトリッキーで見破りにくいアクションで誘い続け、突然、ゴン!と音を立てて止まるようなアタリがあなたを襲います。ブランクはレボリューションRB72MHSをベースにアンサンド仕上げ、ガイドも小口径PE専用に着せられています。繊細なソフトティップがジャックガウディを水中できれいに飛ばし、水中深く、遠くでも即座のフッキングが可能な強靱なミッドからバットパワーを備えています。



ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
SDB74MHS	7'4"	5-18g	PE 1.2号	132cm	7ft用ボロンハンドル・タイプF(Eも可)	ファースト	印籠継ぎ・1&Half-2P



あとがき
清冽な冷たい水に棲む美しい鱒。
私はこの魚に近づきたく、釣りあげるため、あらゆる努力と思考に時間を費やしています。そしてなにより鱒のいる川辺で過ごす時間は最も心が安らぎ、また最も熱くなるのです。そして私の愛する釣り道具とは、シンプルかつ機能的、そして後世に渡って時代に色褪せないものです。続く百年後も紳士が癒される水辺に我々の道具が隣にあることを願って。
2017 年、春。
カスケット代表 手島浩志

目次
序章：釣師の四段階。
イトウへの憧れを抱いて：古和康平 2~9
サクラマス・ブレイクスルー：竹内義貴 10~15
異国の鱒達：宮澤豊 16~19
純血の朱点、天女魚を求めて：滝ヶ平雄太 20~25
滝上のイワナ：藤井幹大 26~31
理想の山女魚：椎葉茂雄 32~37
ハッスルトラッド 38~41
木片小魚で釣りたくて、トラッドミノー、ファルコン 42~45
垂直浮きのトラウトミノー、モンスタープロデューサー 46~47
イワナより山菜：whozy 嫁 48~51
ランディングネット、コンクルージョン 52~55
深淵の夜明け、レイクショアジギング「ジャックガウディ」 56~62
ブランク脱着にこだわる。 63
ベゼルグリップ 64~65
ボロンハンドル 66~67
カスケットオリジナルブランク
ソルティスベイスайд、バルキーバック 68
スベイスайд、トライアンフ 69
レボリユーション、スーパーディスティニィ 70
マークスバイダー、アルセドクライマー 71
ハイパーブレイク、プライベートリバー 72
あとがきと目次 73

Hyper Breake



「本流ヤマメ、サツキマスショートロッドで挑む」この新たな提案は兵庫県の山岡真也氏からもたらされハイパーブレイクは生まれました。考えてみれば昔も6フィートの溪流ロッドは存在しましたが、溪流、本流も万能なロッドである反面、どちらにも使いづらい中途半端な長さという印象がありました。しかし本流域を溪流で使うようなショートロッドで狙うことにしたのはレボリユーションRB55MSの多くの実績から派生。短いのにパワーがあり、素早く瞬時にアクション伝達出来るティップと反発力を求めながら、バットにはパワーがあり、全体にタメのきくショートロッドという一見相反する要素を高い次元で実現させるには6フィートがちょうど良かったのです。ハイパーブレイクはぶれにくいブランクで素早いアクションを長時間出来ることが最大のメリットです。そのため、軽量化はもちろん、ブランク戻りの速さにも注視して開発。また2013年には熱望され源流用のハイパーブレイクHBB51MLSが完成しました。



ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
HBB60MS	6'0"	3-10g	4-6lb	97cm	6ft用ボロンハンドル・タイプC(Dも可) ※ベゼルグリップ対応可	レギュラースロー	印籠継ぎ・センターカット-2P
HBB51MLS	5'1"	2-7g	3-6lb	80cm	5ft用ボロンハンドル・タイプB(Aも可) ※ベゼルグリップ対応可	レギュラー	印籠継ぎ・センターカット-2P

Private River BAMBOO ROD FOR BEZEL



流れを眼前にすると体が勝手に動きだす。ただ黙々と上流へ。休日は自分だけの時間。ひたすら無心に渓魚を追う、バンブーロッド、プライベートリバー。今やロッドブランクは様々な高性能素材ですが、意外と釣りを始めたばかりの少年時代は裏の林から竹を切って、竿を自作した方もあるのではないか。手頃な丸竹にそのまま糸を付け、掘ったミミズや川虫をエサに流れに乗せる。豊かな時代はそれだけで魚が浮きを消し込み、日が暮れるまで我々は水辺で遊んだ。竹竿は案外、僕らの釣りの原点かもしれません。バンブーロッドは天然の縦繊維であり、古くから釣り竿の材料として親しまれてきました。カーボンと比べて性能は劣るものの、釣りが趣味、趣向の世界であるからしてこの議論は意味をなしません。しかしながら、竹に使いやすい性能を追求していく努力を忘れたわけではありません。テーパー設計はもちろん、元来バンブーは中身が詰まっている分、反発力はあるのでガイドは小口径ガイドを採用してもルアーの飛距離減にはつながらない事も新たな発見でした。



PR50MLS (Custom)							
ROD BLANK	全長	ルアーウエイト	ライン	仕舞寸法	グリップタイプ	アクション	継ぎ数
PR50MLS	5'0"	2-7g	3-4lb	80cm	※ベゼルグリップ専用・シングル (ベリーショートも可)	スロー	真鍮金具ジョイント・センターカット-2P
PR50LS	5'0"	2-5g	3-4lb	80cm	※ベゼルグリップ専用・シングル (ベリーショートも可)	スロー	真鍮金具ジョイント・センターカット-2P